

第47回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催 水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・農林水産省・経済産業省・環境省・
全日本中学校長会・水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構



「健全な水循環」

ロゴマーク

第47回 全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和52年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である8月の初日を「水の日」（8月1日）とし、この日を初日とする一週間（8月1日～7日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんを対象に、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

平成26年3月に水循環基本法が成立し、8月1日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

今回は、全国の中学生から7,482編（学校数239校）の応募があり、自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちが表現されたもの、過去に各地で発生している地震や豪雨災害等の経験を通じて水について考察したもの等がありました。

このたび、入賞作文40編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々には深く感謝申し上げます。

令和7年9月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和52年5月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の初日である8月1日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解
昭和52年5月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成26年3月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第10条において、「水の日」が8月1日と規定され、国及び地方公共団体は水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

最優秀賞 (一編)

《内閣総理大臣賞》

人の暮らしと命を支える

宮崎県

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校

一年 大峯 果林

1

優秀賞 (九編)

《農林水産大臣賞》

水との関わり

福島県

矢吹町立矢吹中学校

二年 諸根 さつき

2

《経済産業大臣賞》

水と龍といのちをつなぐもの

千葉県

翔凜中学校

一年 江口 明祐希

3

《国土交通大臣賞》

水でつながる大きな家族の一員として

神奈川県

逗子開成中学校

一年 風間 修羽

4

《環境大臣賞》

僕が守りたい風景、きれいな水

滋賀県

近江兄弟社中学校

一年 福岡 京

5

《全日本中学校長会会長賞》

生かし生かされる

長崎県

長崎県立宮崎西高等学校附属中学校

一年 小嶺 彩

6

《水の週間実行委員会会長賞》

メダカが生き生き泳ぐ川

京都府

京都先端科学大学附属中学校

二年 楠本 健琉

7

《独立行政法人水資源機構理事長賞》

水道への感謝と僕の決意

石川県

学校法人稲置学園星稜中学校

一年 吉田 喜一

8

《シヤワーズ賞》

生き物との共生のために

福井県

福井市大東中学校

三年 三木家 杏珠

9

《中央審査会特別賞》

川の始まりと水の未来

滋賀県

東近江市立能登川中学校

三年 谷澤 あかり

10

入選 (三十編)

岩手県 盛岡市立上田中学校

三年 芥川 雄哉

和歌山県

和歌山県立田辺中学校

三年 坂倉 朱音

27

宮城県 石巻市立蛇田中学校

二年 坂本 悠維

和歌山県

和歌山県立向陽中学校

二年 松元 菜那

28

秋田県 秋田市立岩見三内中学校

二年 小笠原 弘礎

鳥取県

鳥取市立桜ヶ丘中学校

三年 高橋 彩夏

29

茨城県 茨城大学教育学部附属中学校

二年 石塚 愛菜

愛媛県

今治市立南中学校

三年 前田 佳汰

30

栃木県 茨城大学教育学部附属中学校

三年 大越 玲舞

佐賀県

佐賀大学教育学部附属中学校

三年 田中 絆愛

31

東京都 栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校

二年 金 悠俊

大分県

大分県立宮崎西高等学校附属中学校

三年 西嶋 奏人

32

東京都 東京女子館中学校

三年 竹内 杏

宮崎県

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

三年 堀川 和瑚

33

東京都 和洋九段女子中学校

二年 伊藤 由希

鹿児島県

学校法人志学館志学館中等部

二年 宮脇 愛

34

三重県 高田中学校

二年 水谷 真菜香

オランダ

アムステルダム日本人学校

二年 榎内 友彩

35

滋賀県 近江兄弟社中学校

一年 林 咲和

オランダ

アムステルダム日本人学校

二年 小松 結奈

36

京都府 京都先端科学大学附属中学校

三年 山本 栗央

オランダ

アムステルダム日本人学校

二年 清水 葉南

37

大阪府 大阪府立水都国際中学校

三年 面海 奏

ブラジル

サンパウロ日本人学校

一年 橋本 志織

38

大阪府 大阪府立水都国際中学校

三年 八木 美薫

ブラジル

サンパウロ日本人学校

二年 石垣 風花

39

兵庫県 兵庫教育大学附属中学校

二年 上田 悠智

ブラジル

サンパウロ日本人学校

二年 神戸 風花

40

兵庫県 西宮市立山口中学校

二年 前田 直太郎

ブラジル

サンパウロ日本人学校

二年 神戸 風花

41

資料

第四十七回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター

第四十七回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第四十七回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿

第四十七回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

第四十七回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

第四十七回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

目次

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

人の暮らしと命を支える

宮崎県

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校

一年

大峯

果林

栓をひねると水が出る。朝、顔を洗う。渴いたのどを潤す水をコップに注ぐ。料理をする。洗濯をする。お風呂に入る。生活のどの瞬間にも水がある。その存在は自然で、意識することはほとんどない。水があるから生活が回るということを忘れてしまっている。けれど、私は気が付いた。この当たり前が、誰かの努力によって支えられているということに。気付いて以来、水の流れる音が少し違って聞こえるようになった。

小学校四年生の夏の終わりのこと。大きな台風十一号が九州に接近し家の中にこもったが、風と雨の音が大きく響いて、不安でいっぱいだった。そんな中、父は黙って作業着に着替え、懐中電灯を手にも外へ出て行った。

私の父は、市役所の水道課に勤めている。人々が安心して水を使えるように、見えないところで水を守っている。水が止まれば、昼夜関係なく現場に向かう。休日に家族で出かけているときでも、水に関わる一大事を察知すると急いで引き返して現場に向かうこともある。台風の接近はまさに一大事だ。父が嵐の中へ出て行ってしまおうのが不安でたまらなかつたけれど、ぴんと背筋の伸びた父の背中を見たら、何も言うことはできなかった。

翌日、帰宅した父は疲れた顔をしていたが、私の目を見ながら話をしてくれた。台風の後、病院のある地域で断水が発生したという。

「病院の断水を復旧できて本当に良かった。想像して。病院が断水になると医療に使う水が足りなくなる。つまりそれは……。」

「命に関わる……。」思わず言葉が出てはつとした。水は生活に必要なだけではなく、人の命に欠かせない存在なのだ。水がなければ、治療も消毒もできない。薬を飲むこともできない。手も洗えずうがいもできず、感染症のリスクも高くなる。水がないことで、守れるはずの命が守れなくなる。思わず父の顔を見た。父の目はまっすぐ前を向いていた。そし

て、以前父が話していたことを思い出した。

「日本では、水を使えることが当たり前になりすぎていけるせいか、この仕事をしていて感謝されることはあまりない。水が使えなくなつて初めて水の大切さに気付いて感謝する。」その言葉の意味がようやく理解できた。

私には水道管を直すことはできないけれど、水を無駄にせず、感謝して使うことはできる。水の一滴滴が、水のために働く人たちの技術と努力、そして強い責任感によって届けられていると知った今、小さな行動にも意味があると感じている。学校では「水は限りある資源」と習った。でも私は、水はそれだけでは語れないということに気付いた。水そのものだけではなく、水を支える人たちの知識や技術、経験、使命感をもって働く姿もまた、私たちの暮らしと命を守る大切な資源だ。例えば「台風」という災害があつたとしても、水を支える人の「水を止めない」という想いが、水をつなぎ、安心を生みだしている。自然と感謝と尊敬の気持ち私の心に広がっていった。水の波紋が広がるように。

そして、改めて考える。今、地球では気候変動が進み、水不足や災害が増えている。水を守る仕事の価値は、これから更に大きくなっていく。どんなに技術が進化しても、それを動かすのは人間の想いと未来を見つめる使命感だ。父は今日も人々の暮らしと命のために働いている。決して目立つ仕事ではないが、未来を支える確かな力になっている。私もいつか、目立たなくても誰かを支える人になりたいと思う。今、私は水を大切に使い続ける気持ちは誰にも負けない。小さなことでも自分にできることを見つけて行動したい。たった一滴の水でも、命の水になれるのだから。

ふと顔を上げると、母が台所で流す水の音が心地よく私の耳に響いてきた。

農林水産大臣賞（優秀賞）

水との関わり

福島県 矢吹町立矢吹中学校 二年 諸根 さつき

私の家は畜産農家で、黒毛和牛を育てています。牛を育てるためには、水が必要不可欠で、私の家では地下五十七メートルから地下水を引き、約三百頭の牛がその水を飲んでいきます。

私も幼いころから牛の世話をよくしていました。牛は汚れた水を絶対に飲まないのが常で、きれいな水を飲める環境を保持しなければなりません。その他、牛を育てるためには、稲わらがらが必要で、田植えをして、米を育て、収穫した後のわらを集めて牛に与えています。

米を育てるためにも水を欠かす事は出来ません。

水は天からの贈り物で雨や雪が降らないと農業は成り立ちません。自然の恵みで私達は生かされています。しかし、時にその自然が猛威を振るう事があります。

令和元年十月、私が小学二年生の時に台風十九号が日本列島に上陸し、私の家も甚大な影響を受けました。家の周りの川が決壊して氾濫し私の家と牛舎は川の濁流にのみ込まれました。私と姉達は避難していました。両親は、川が氾濫する直前まで牛達を高台に移動したりトラックに出来るだけ牛を詰め込んで一頭でも多く牛を助けるために手を尽くそうとしましたが、全頭助ける事は出来ませんでした。残された牛は生き延びた牛もいましたが、濁流に流された牛、牛舎の中で残酷な姿で亡くなった牛も少なくありませんでした。水の力はとてつもなく、牛舎の中は沢山の流木やがれきや刈り取った後の稲わらなど、その他沢山の泥で埋め尽くされていました。

牛舎や家の壁には二〜三メートルの高さのある水害の跡が残っていました。幼かった私には、その状況を直ぐに受け入れる事が出来ず恐怖と悲しさで全身が震えた事を覚えています。

きれいな水を牛に飲ませるために母親の実家から祖父が何度も水を運んで牛に与えました。あの時の美味しそうに水を飲む牛の姿は忘

れる事は出来ません。

牛舎の蛇口からきれいな水が出るまで数日かかりました。私も一頭に水を飲ませる手伝いをしましたが、本当に水は貴重だと子供ながらに痛感しました。

あれから月日が経ち、我が家は困難を乗り越え両親は牛を水害から守るため高台に牛舎を建て日常を取り戻し、米、野菜を作り、牛を育てています。

現在世界各地で自然災害が起こり、苦しんでいる人々が沢山います。地球温暖化の影響だと言われています。これから先の地球の環境を良くするための行動を再認識して私が出来る事、節水、節電などを常に心がけて生活したいと思えます。

水に感謝をして。

経済産業大臣賞（優秀賞）

水と龍といのちをつなぐもの

千葉県 翔凜中学校 一年 江口 明祐希

私達の生活に欠かせない「水」。毎日あたり前のように使っているけれど、水がどこから来て、どんな思いがこめられているのか、意識することはありませんでした。今回、水について自分で調べてみて、自然や神さま、そして地域の人々の思いが深くつながっていることに気づきました。

私の住んでいる千葉は、利根川水系の水に支えられています。利根川は、群馬、埼玉、千葉、東京など、関東の広い地域に水を届けている大きな川です。山に降った雨や雪が長い時間をかけて川となり、ダムにたまり、水道管を通って、わたしたちの家庭に届いています。この水がなければ、料理も洗たくもできないし、お風呂にも入れません。水があることが、どれほどありがたいかをあらためて実感しました。

調べていくと、水と信こうが深く結びついていることもわかってきました。昔の人は、水には神さまの力がやどると考えていて、特に「龍神」という神さまが大切にされてきました。神社やお寺のちようずやでは、龍の口から水が流れていて、それで手や口を清めてから参拝します。自然と共に生きてきた日本人の感謝の気持ちのあらわれだと思います。

私がとても感動したのが「忍野八海」という場所の話です。山梨県にあるこの場所には、富士山に降った雪が何万年もかけて地下を通り、ろ過されてわき出した池があります。その水はとてすき通っていて冷たく、まるで龍の息づかいが聞こえてくるようです。昔から人々はその水を生活に使いながらも、神さまの宿る場所として大切に守ってきました。水を「ただの資源」ではなく、「神聖な存在」として見つめる日本人の心が、そこには今も息づいています。

こうした信こうは、遠い場所だけのものではありません。実は、わたしの通っている学校、翔凜中学校のしきちにも「浅間様」がまつられています。この神さまからの水がわいて出ているのが、学校の下にある「大

堰」であると言われていて、地元の人たちが昔から稲作や生活用水に使ってきたと知り、とてもおどろきました。私が毎日通っている学校の場所にも、神さまが生み出す水と人々の信こうがあるのです。

そして、その水への感謝の気持ちを伝えるのが「神さまのお祭り」です。水を与えてくれる自然や神さまへの感謝、それを守ってきた地域の人たちの思い。お祭りは、にぎやかで楽しいだけでなく、そうした心を伝える大切な行事だと気づきました。

今、地球温暖化の影きようで、世界中で水不足の問題が起きています。雨の降りかたが不安定になり、ダムの水が足りなくなることもあります。また、私達の生活を支えるAIやクラウドなどの技術も、便利な一方で多くの電力や水が必要とすることを知っておどろきました。特にコンピュータを冷やすための水の使用量はとて多く、私達が気づかない所で自然に負担をかけているのです。

便利な技術は生活を豊かにしますが、自然や資源を守る意識がなければ未来は苦しくなってしまう。技術の恩けいとその裏にある影きようを見つめることも、わたしたちにできる大切な学びです。環境を考えると、ただ「守ろう」と言うだけでなく、自然に神さまがやどると考える心が大切だと思います。山や川、木にも命があり、敬意を持つことで、自然と人はもつと仲よくできるはずです。

水は、いのちをつなぐもの。自然と人、人と人をつなぐもの、そして、見えないところで龍の力が流れているかもしれない、そんな神び的な存在です。これからも神さまに、水にかんしゃし、自然を大切にしながらいきたいと思います。

国土交通大臣賞（優秀賞）

水でつながる大きな家族の一員として

神奈川県 逗子開成中学校 一年 風間 修羽

僕は、一昨年の秋の草刈りから始まって、去年一年、南アルプスの麓にある田んぼで米作りをする機会を得ました。その田んぼは、棚田の一番上の場所にあつて、川の取水口の開け閉めや、取水口に落ち葉や木が詰まったら掃除をするのも、その田んぼ仕事の一つでした。

田んぼから取水口までの道のりは、珍しい山野草などが生えていたり、風向きによっては獣の匂いがしたりするような森の小道でした。地元の人が、「ここは熊が出るよ。」と言っていたので、少し緊張しながら、父や兄と大きめの声で話しながら向かうのですが、この大きな森全体から水を分けてもらいにくんだという気持ちが出て、とても特別な仕事のように感じられ、僕の好きな仕事の一つでした。

川から引かれてきた水は、とても冷たいのですが、田んぼに入るとどんどんぬるくなっていきます。場所によって、水の温度も違って、その温度の違いによって稲の生育の差が見えたり、生えている草の種類が違ったり、集まっている生き物が違ったりするのも興味深かったです。

この田んぼに引かれている水がどこから来るのかが知りたくなり調べた内に、流域地図というものがあることを知りました。流域地図というのは、河川に流れ込む降水の降り集まる地域を表した地図です。その地図によると田んぼに引かれている水は、富士川水系であるということがわかりました。流域という視点で土地を見ると、山の尾根が、流域の境になっているということがわかりました。

僕が、家族と一昨年登った仙丈ヶ岳の山頂に降った雨は、東側なら富士川に流れ、西側なら、天竜川に流れる。大地の凹凸が水の流れを決めていて、尾根に囲われた区域が、まるで一つの水でつながった大きな家族のように感じられました。

僕たちの田んぼを潤してくれた水は、水路を通過して、隣の田んぼに流れ込みます。その水はまた、その次の田んぼに流れ込み、そうして順番

に全ての田んぼが潤されていきます。稲作というのも、水の流れで繋がった家族みんなの命の糧を生み続ける営みなんだということがわかりました。

僕が暮らしている地域は、流域の視点から見ると下流域にあります。そこには住宅やビルが立ち並び、たくさんの方が住んでいます。田畑はそれほど多くありません。飲み水も食べ物も少し離れた地域から届けようという事でまかなわれています。けれども、水でつながった家族の一員であることには変わりありません。

上流に住み、今まで水源を守ってくれてきた人たちの高齢化が進んでいます。命を支える水を共有する大きな家族として、下流の人と上流の人が一緒に豊かな水を守り続ける事ができる仕組みを作っていきたいです。

暑い中での、田んぼの中や土手の草取りは大変でしたが、よかったのは、時折水の上をととても涼しい風が吹いてくること、そして何より蚊がいなかったことです。たくさん飛んでいたトンボが食べてくれたのではないかと思います。そして、秋の収穫時に、稲穂が波のように風に揺れ、その上をたくさんさんのトンボが飛んでいる光景を見た時、古事記で日本の国のことを「豊葦原の瑞穂の国」と呼んでいたたり、本州のことをトンボの姿をイメージして「秋津島」と呼んでいたたりするのは、こういう光景が全国に広がっていたからなんだなと思いました。そして純粋に美しいなと思いました。

今私たちが豊かな水を使えるのは先人たちの努力のおかげです。水でつながる大家族の一員として、先人たちの思いを引き継ぎ、未来へ豊かな環境を届けることは、今を生きる私たち一人一人の使命ではないでしょうか。

環境大臣賞（優秀賞）

僕が守りたい風景、きれいな水

滋賀県 近江兄弟社中学校 一年 福岡 京

僕の小学校の裏には、小さな川があります。そこでは五月下旬から六月中旬にホタルを見ることが出来ます。家の近所には小さなエビがたくさんいるところや、田んぼに続く用水路にはザリガニがとれる特別な場所もあります。僕は生き物と自然あふれるこの町が大好きです。ホタルを守る取り組みについて、看板が川岸に立てられています。

産卵の時期には、あえて草刈りをひかえて、地域の方々が繁殖を守る活動をしてくれているようです。そのおかげでホタル鑑賞ができています。その時に聞いた話では、ここはホタルのエサとなるカワニナや草木、砂もあり生息するのに最適な場所であること。また、滋賀県に生息するゲンジボタルは卵から成虫になるまでに約一年かかり、成虫の間は水しか飲まず、メスは産卵した後は二、三日で一生を終えることでした。幼虫の約十ヶ月間、水の中でカワニナやタニシなどを食べながら成長していきます。一生の大部分を水の中で生きているので、きれいな水とエサが豊富であることが大切だとわかりました。たくさんの小さな光が飛び交いながらゆらゆらと幻想的な風景を見て、僕は自然の大切さと、このきれいな水を守りたいと思いました。ただ、僕が小学一年生の時に見たときから比べるとホタルの数が年々減っているような気がしました。

小学三年生の時、河辺いきもの森で里山保全に参加しました。夏の活動では水質保全や自然観察の目的で、川に入りました。その時に水の生き物を知り、水はどこからどうやって来ているのかを、勉強をしました。その時の僕は、難しい話よりも目の前にある川でサワガニを発見したり、水生昆虫をつかまえることに夢中でした。今となっては、生き物がたくさん生息している環境がとても大事であることに気がつき、その経験がきれいな水とは何なのかを考え始めるきっかけとなりました。

「本当にきれいな水とは何なのか。」人間にとって、飲める水こそが、きれいな水かもしれないませんが、生き物にとってはきれいな水とは言えないのではないかと。水道水は殺菌作用がある塩素が使われています。さらに、この森の川のことを調べました。もちろん水道水は使われていません。愛知川えちがわの川底の砂利層により自然に浄化されたものを伏流水と言い、それがわき水となって、森のあちこちに小さな流れが川になっているそうです。その仕組みをやっと理解できました。生き物たちにとってきれいな水とは、有害物質の含まれていないことはもちろん、エサとなるプランクトンが豊富にあることもきれいな水の条件です。植物、海や川底で生きる魚たち、昆虫、動物たちにとってそれぞれが、安全に暮らせる水、きれいな水はひとつではないと僕は思います。

そのためにできることもひとつではないのです。そこで、家族できれいな水にするためにできることを考えました。僕ができることは、外出先や川などにゴミを捨てない。ゴミがあつたら拾う。食べ残しをしない。食器の汚れはふき取ってから、歯をみがく時も水を止めてむだにしない。洗剤を使いすぎない、お風呂やシャワーの時もむだにしない。今日からできることを始めることです。日ごろから、水に困っていないと、つい水の大切さを忘れてしまいます。

きれいな水を守りたい。みんなできれいにしようとする「想い」を忘れないようにしたいです。ひとりひとりが水を大切にすることができれば、その水を取りまく環境を守ることができます。この先、自然や生き物、人間たちがうまく共生し続けることで、十年後二十年后にホタルがたくさんいる風景を見ることができるようです。僕はこれからも自分から水の大切さを発信し続けたいです。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

生かし生かさされる

長崎県

長崎大学教育学部附属中学校

一年

小嶺 彩

顔を洗うこと。ほかほかのご飯を食べること。歯を磨くこと。温かいお風呂に入ること。そして、水を飲むこと。これらは私たちに当たり当たり前で、なくてはならないものであり、これらには全て「水」が関わっている。

「蛇口をひねれば水が出る」

私は今まで、ごく普通の当たり前のことだと思っていた。でも、社会の現状はどうだろう。私たちがきれいでおいしい水を飲んでいて、瞬間、どんなに汚くてもその水を飲むしかない人がいる。私たちが自動販売機で水を買っている瞬間、世界には安全な水を手に入れられない人がいる。そう考えると、「水」とは、決して当たり前ではないことを痛感する。

水がどれほど大切なものか。私はふと曾祖母の話思い出した。私の住む場所から、ある世界遺産が見える。それは、「端島」通称「軍艦島」だ。明治から日本の近代化を支えたその島は、もともと岩礁だったため、水の確保は非常に難しいことだった。長崎市から船で運ばれる配水が、飲み水や洗濯用水などに制限されることもあった。水が貴重な資源だったからこそ、島民全員が節水に取り組んでいた。最終的には、日本初の海底水道が設置され、水の確保ができるようになった。曾祖母はその島に住んでいた友人がとても感激していたのを覚えている、と言っていた。長崎の歴史から探しても、水は、昔から貴重なもので、私たちの生活に欠かせないものだったことが分かる。だが、「欠かせないもの」というだけではない。

「長崎大水害」。これは、今から約四〇年ほど前の、二九九人が犠牲になった災害だ。土石流、がけ崩れ、河川の氾濫などにより、倒壊・浸水など多くの家にも被害が生じた。私は、学校でも学習し、担任の先生や両親、祖父母から実体験をきいて恐怖を感じた。「水」とは、私たちの生活に「欠かせないもの」で、私たちの生活を「脅かすもの」でもある。

もう一つ私が伝えたい水の表情、それは癒しでもあることだ。長崎県の島原市を訪れた時、私はそれを実感した。島原市は、水がきれいな町として有名だ。現在島原市には五〇か所を超える湧水地がある。そんな島原市で私は、信じられない光景を目にしたことがある。それは、車道の脇の水路を鯉が泳いでいたことだ。私が先に感じたのは、癒されるといふよりも、驚きだった。今までそんな光景を一度も見たことがなかったからだ。調べてみると、島原市では、定期的な清掃が行われている。水路を鯉が泳ぐ、という美しい光景を目にすることができると、地元の方々の努力があつてこそなのだと思う。

私たちの生活に欠かせないもの。私たちの生活を脅かすもの。私たちを癒してくれるもの。そんな「水」に、私たちはどう関わっていくべきなのだろうか。私は、「水との共栄」が大切だと考える。互いに助け合い、榮えていく。私たちは水を使って生活する。でも、無駄にせず大切に使うことで、水と共栄することができ水に寄り添うことができると思う。

水を改めて考えていくと、当たり前だけど、ありがたいことに気付く。私の何気ない日常にも数多くある。私は習い事のダンスで、一時間以上練習すると喉が渇く。水を飲むと自然に「おいしい！」と言葉が出るくらい生き返る。このような何気ないことでも、水と生命が直結していることを感じる瞬間だ。

世界には、水を簡単に手に入れられない人がたくさんいる。私たちにできる最大限のことは、長崎大水害に関わらず津波など、災害の教訓を伝えることで、水がどれだけ大切なのかを知ること。水を決して無駄にせず、傷つけないこと。そして、多くの人に水が届くように支援すること。この三つだと思う。私たちの豊かな生活ひとつひとつに感謝し、これを今、多くの人へ、そして次の世代へとつなげていきたい。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

メダカが活き活き泳ぐ川

京都府

京都先端科学大学附属中学校 二年

楠本 健琉

僕は生き物が好きだ。春にはメダカ、夏にはカブトムシやクワガタを捕まえて飼育している。ふと考えた。カブトムシやクワガタは京都市内でも見つかるのに、メダカがない。なぜだろう？

僕がメダカを採るのは、京都府北部にある祖父の田んぼの用水路だ。京都市内との違いは何だろう。祖父に尋ねると、「メダカはきれいな水でしか生きられへん。ここには、皆が食べるお米を育てるための澄んだ水と豊かな自然があるからメダカもたくさん育つんですよ。」と教えてくれた。僕はハツとした。メダカが暮らせるかどうかは、水の清らかさにかかっているんだ。「じゃあ、鴨川の水がもつときれいになればメダカも住めるん。」と尋ねると、祖父は「そやで。」と力強く答えた。

ネットで調べると、メダカは京都府のレッドリストに載り、絶滅危惧種に指定されているという衝撃的な事実を知った。本来、どこにでもいる普通の魚だったが、今では府内の生息地も限られ、京都市内ではほぼ絶滅状態にあると書かれていた。ショックだった。さらに調べると、かつて絶滅したと考えられていた深泥池で、奇跡的に発見され、今は保護活動が進められていることが分かった。一年前学校の探究活動で深泥池に行った時には見つけれなかったが、確かにいるんだ。

なぜメダカはこんなに減ってしまったのか。理由は三つ。一つ目は、生息地の消失。都市開発で田んぼや小川が減り、住める場所が失われた。二つ目は、水質汚染。農業や生活排水で水が汚れ、メダカが生きるのに適さない環境になった。そして三つ目は、外来種の侵入。ブラックバスやブルーギルがメダカを捕食し、生息を脅かしていた。このままでは、メダカは本当にいなくなってしまう。

何かできることはないか。僕は祖父の庭にある大きな水鉢でメダカを育てることにした。用水路でメダカを捕り、水鉢に入れた。けれど、しばらくすると水が濁り、メダカの動きが鈍くなった。このままではダメ

だ。まず、水草で酸素を増やし、ろ過砂利を敷いて水の汚れを減らした。また、別の水鉢にためた雨水を利用してカルキを抜いた自然な水を入れるようにした。メダカは元気に泳ぎ回るようになり、卵を産んだ。共食いしないよう、卵を別の容器に移し、更に幼魚用の環境も整えた。それぞれに雨水が流れ込むような装置も作った。手間はかかったが、百匹を超えるメダカが育った。この経験から、僕は「水を美しく保ち、環境を整えることでメダカの命をつなぐことができる」と実感した。

その後、さらに身近な水環境にも目を向けた。夏休みの自由研究で近所の公園のビオトープを調べてみた。アメンボウやタガメ、水カマキリが生息する場所で二週間。数か所で水を採取し、顕微鏡で観察したところ、流れのある場所にはミジンコやアオミドロなどの微生物が豊富にいたが、流れのない淀んだ場所ではヘドロがたまり、生き物がほとんどいなかった。この違いから、水の循環が生態系にとって重要であることを学んだ。

僕はこの体験を通して、日常生活でも水を守るためにできることがあると気づいた。例えば、家や学校で水を無駄にしないこと、雨水を水やりに活用することなど、小さな工夫の積み重ねが水環境の改善につながる。京都でも水環境を整え、メダカや蛍、アユ、オオサンショウウオなどを守る活動が行われている。僕もその活動に参加したい。一人一人ができることは、小さな取り組みでも、人間の体の六十%、魚は七十五%が水でできている。すべての生き物の命を支える水を大切にすると、増えれば、メダカが住める場所も、僕たちが快適に暮らせる環境も広がっていくはずだ。僕の夢は、いつか京都市内の川で再びメダカが元気に泳ぐこと。そのために、水を守る活動を広げたい。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

水道への感謝と僕の決意 石川県 学校法人稲置学園星稜中学校 一年 吉田 喜一

僕は今まで、水道についてあまり考えたことがありませんでした。「蛇口をひねる」という言葉がありますが、僕が思うのかべる水道、特に手洗い場のイメージは、センサーに手をかざすと自動で水が出てくるタイプです。場所によっては、お湯が出てくる場所もあります。便利だなあとは思っていたけど、それが特別なものだとは思っていませんでした。

今回この作文を書くにあたり、日本の水道の仕組みを考えると、非常に優れた技術だと改めて思いました。

僕は昔のことを考えてみました。人々の暮らしを考えた時に、最初に出したのは桃太郎のお話です。おばあさんは川で洗たくをしていました。つまり、水道はまだ無かった事が分かります。次に思い出したのは、トトロです。作中では、井戸水を使って炊事をしています。その次に思い出したのは、ドラえもんです。のび太のママは、水道のある台所で料理をし、洗たく機で洗たくしています。

桃太郎の時代背景は、室町時代末期から江戸時代初期頃とされています。トトロの時代背景を調べてみると、昭和三十年代初頭とのことです。約七十年前ということになります。ドラえもんのアニメがスタートしたのは、一九七九年です。今から四十六年前です。

つまり、トトロの時代からドラえもんの時代までの三十年弱の間に、水道をはじめ、人々の暮らしが激変していったことが分かります。この三十年間は、高度経済成長と呼ばれる時期と、日本の公害病の問題が深刻化した時期と重なることも分かります。日本の水の安全がおびやかされた時代です。

この時期を乗り越えてくれたおかげで、僕達の世代は、水が安全ではないものかもしれない、とは考えたこともなかったのだ、と思いきらされました。

「安全」とは色々な意味で捉えることができます。公害にさらされて

いるものではない、という意味と、地震などの災害時にでも「出なくなる」という心配がない、という意味、それから、「無くなる心配がない」という意味の安全だと僕は考えました。

能登半島地震発生時には、大規模な断水が長く続いたことは記憶に新しいところだけど、それでも、様々な公的支援や、水道に関わる施設の人々、暮らしていた人々の工夫や苦勞のおかげで、少しずつ前に進んでいると思います。僕にはまだ感謝することしかできないけれど、水道が出なくなるなんて考えもしない、危険だから直接飲めない、なんて考えもしないで生活してこられたことに、改めて感謝しなければならぬ、と思いました。

僕達の世代は、「どんどん作れ！どんどん増やせ！」という時代ではありません。保育園の頃にはすでに「エコ」という言葉は知っていたし、SDGs、サステナブルという言葉も小学校で習いました。「限りある資源をどう守るか？」という時代です。

僕が小一になった時、過去最少人数の新一年生、とニュースになったそうです。年々人口が減少していることが分かります。人口が減少している中で、水道に関わる職業を選ぶ人、となると、更に割合は減ることも想像できます。そうなると、水道の安全を維持するのが難しくなる日がくるかもしれません。そう考えると、人も資源といえます。

水の未来は、僕達一人ひとりが担うのだ、守られるだけでなく、守るにはどうしていくべきか、考えていきたいと思っていました。今すでに、待ったなしの環境問題や人手不足の問題にさらされています。僕が社会に出るにはまだ時間があるけれど、水道に関わる仕事の皆さんへの感謝の気持ちを勉強に注ぎ、しっかりと納税できる人になっていきたいです。

シャワーズ賞（優秀賞）

生き物との共生のために

福井県 福井市大東中学校 三年 三木家 杏珠

私は「水」という言葉を聞くと必ずと言っていいほどに田んぼが思い浮かぶ。私の家は福井市の市街地から約四十分車を走らせたところに位置する上味見という場所で、無農薬栽培米を育てる活動に参加している。そこは私の住んでいる場所とは正反対と言ってもいいような自然豊かな地域だ。私は毎年、稲作の時期になると、家族とともにその活動の一環である草取りに参加している。今だからこそ、農作業の戦力として参加しているが、小さな頃は、ひたすら生き物採集をしていた。父といっしょにヘビをつかまえたり、サワガニやオタマジャクシ、カエルを探していたのも楽しい思い出。

稲作は、田植えが始まる春から、稲かりをする秋にかけて行われる。この中で一番大変なのが「夏」の農作業だ。その活動では、米を無農薬で育てているため、手作業で草むしりをしなければならない。真夏の日差しに背中をジリジリと焼かれながら、腰をかがめた体勢で作業し続けるため、想像以上に重労働だ。おまけに次の日には、全身が動かなくなるほどの筋肉痛におそわれる。しかし、私はこれほどの悪条件でも、田んぼに足を踏み入れるのを嫌がったことは一度たりともなかった。私には農作業の後に一番楽しみにしていたものがあつたのだ。それは「こしよらずの滝」での水浴び。同じ田んぼ仲間にも教えてもらったのがきっかけだ。初めてこしよらずの滝を目にした時の感動は今でもよく覚えている。見たことがない程に澄んだ冷たい水。そしてサンショウウオと初めて出会ったのもその時だ。サンショウウオという存在を知らなかった私は、母の呼び声でそのことを忘れ、車に戻った。

再びそのことを思い出したのは、近くの温泉で疲れをいやしていた時だった。ふと目に入った掲示物。そこにはついさっき目にした小さな生き物が写っていた。絶滅とサンショウウオの二つのキーワードが目飛び込んできた。そう、先程見た生き物は絶滅の危機にさらされているサ

ンショウウオだったのだ。

私は家に帰ってすぐさまパソコンに向かい、その二つのキーワードを打ち込んだ。すると、その要因の一つとして、「農耕地の放棄に伴って起る産卵場所の消失・悪化」が最も多いことが分かった。里山の稲作では、ため池が作られ、水田の周囲には水路がめぐらされる。このような場所にサンショウウオは産卵するため、水田が一つ減るごとに、サンショウウオの絶滅に一步近づいてしまうのだ。

それは私の住む地域でも着々と進んでいる。元々水田だった土地がうめ立てられ、一つまた一つと家が建っていく。人間にとって住みよい街になる一方で、サンショウウオ達生き物にとっては生きられない街と化す。

そんな私達に今求められているもの。それは「共生」だ。私達が今住んでいる場所を水田に戻すことは難しい。しかし、今ある水田を守り、今サンショウウオの生息が確認されている場所を保護することならば可能なのではないだろうか。

水田を守るために私にもできることを考えてみる。それは、「無農薬栽培の田んぼの保存活動に参加し続ける」ことだ。水田を守り続けることは、サンショウウオだけでなく、お米を主食とする私達日本人の生活を守ることもつながる。また、水田が減り続けている要因には、便利さを求める心だけでなく、担い手不足も挙げられる。農業を始めるには高額な初期費用がかかり、また天候に左右されやすく、収入も安定しづらい。そんな中でも農家さんは水田を守り続けてくれている。私はこれからも水田を守り続けている人々への感謝の気持ちを忘れず生きていくことを心に誓った。

中央審査会特別賞（優秀賞）

川の始まりと水の未来

滋賀県 東近江市立能登川中学校 三年 谷澤 あかり

みなさんは「川の始まり」を見たことがありますか？

私が住んでいる滋賀県では小学四年生になると「やまのこ」と呼ばれる森林体験学習があります。やまのこでは、近くの山や森に行き、間伐体験や森林散策を通して自然の大切さや保全活動の意味などを学びます。

私も四年生の時に市外の山でやまのこ学習を受けました。森林散策で遊歩道を歩くとやがて岩肌から水滴が滴る場所に着きました。

案内人のおじさんが私たちの方を振り向いて説明を始めました。

「皆さん、この岩から滴っている水滴が見えますか？これは、川の始まりです。山に雨が降ると雨水が土の中に染み込みます。雨水は何十年もかけて土の中を通り、こうして地表に出てきて、川になるんですよ。山は沢山の雨水をためるので「緑のダム」とも言われています。緑のダムによって雨水は濾過されてきれいになるんですよ。山と水は深くかかわっていて、きれいな水を守るには、健やかな山を守ることが大切なのですよ。」

私は目の前で滴る水滴がやがて川になり、湖に流れ、海の一つとなり、また雨として降る長い過程を想像して、水の雄大な旅に感動しました。

やまのこで川の始まりに会ってから、私は環境保全活動に興味を持つようになりました。

一昨年の春から、年に一回行われる近所の川の清掃活動に参加しています。活動では主に外来種の水草抜きや川底に溜まったヘドロの掻き出しなどを行っています。

清掃活動が始まり、早速スコップで泥を掻き出そうとすると泥の中からカツンと硬い手ごたえがしました。何だろうと思つて水中からそれを引き上げてみると、なんとジュースの空き缶でした。驚いて周り

を見ると、私の他にもゴミを持っている人は何人かいました。その後も所々でゴミを見つけ、いつのまにか活動内容の中心はゴミ拾いへと変わっていききました。活動が終わる頃にはなんとゴミ袋四袋分のゴミが集まりました。

私は身近な環境が人によって汚されていたことを知り、心が痛くなりました。今日拾ったゴミやこれまで川を流れていったゴミが環境に大きな悪影響を与えたことを考えると恐ろしくて鳥肌が立ちました。

清掃活動を行った翌日、川を見に行くとマガモの親子、シラサギ、ホンモロコの群れなどが見られました。心なしか、川の生き物たちもきれいな川に喜んでいるように見えました。私はその瞬間昔見た「川の始まり」を思い出し、川だけでなく水の旅路全てをきれいにしたい、人間を含む、水と共に生きている生き物を幸せにしたいと思いました。私は水を守るためにわたしにもできることを二つ考えてみました。

一つ目は森林を育て、「緑のダム」を豊かにすることです。植樹体験や間伐体験に積極的に参加し、きれいな水源の源となる健やかな森林を育てていきたいです。家族や友達、地域の方にも呼びかけ近くの山から健やかに活性化させたいです。

二つ目は水の大切さを様々な人に教えることです。水に関するポスターを作つて公民館や市役所など公共の場所に掲示したり、水についてのクイズなどをSNSに投稿したりすることで多くの人に水に関心を持ってもらいたいです。

私は四年生の頃に見たあの小さな雫を今でも覚えています。いったん「緑のダム」に染み込んだ水が濾過されて再び地表に流れるには四十年ほどの月日がかかるそうです。今私たちが汚した水も、大切に使った水も、長い月日を経て未来の私たちに戻ってきます。私は水を守りたい。私が大人になっても、川の始まりの雫が美しく輝くように。

入選

水を生かす。水で生きる。

岩手県 盛岡市立上田中学校 三年 芥川 雄哉

「水とは何か」と考えるとき、造作なく答えを出すことは、多くの人にとつて難しいことだろう。少なくとも、僕にはできなかった。

けれども昨年、中学校での課外活動の一環である職場体験で、土木工事を主要事業としている会社へ伺い、水がいかに僕たちの生活に関わっているのかを知った。そして、ダムが川を流れる水の量を調整する「治水」と、ダムに溜まった水を水力発電や工業用水などに利用する「利水」があることなど、本当に数多くのことを実際にダムへと赴き自分の目で見る事ができた。

僕が住む盛岡市には、「中津川」という、市内中心部を流れる一級河川がある。僕が小学生のときには、よく中津川に行き、友達と釣りを楽しんだ。小学校の行事で浅瀬の川に入り、昆虫採集などをした思い出もある。

この職場体験では、治水と利水、上水道といった多くの役割がある、いわゆる多目的ダムである綱取ダムを訪れた。担当の方の説明から、この綱取ダムの下流に僕たちの遊んでいた中津川があるということを知り、衝撃を受けた。小学生のとき僕たちが遊んだあの中津川と綱取ダムは、人の足では到底往復ができないほどに離れていたからだ。

ダムでは、川の氾濫が起きないように水を貯蓄する「洪水調節」が行われている。僕は、盛岡に大雨が降った日、「中津川が氾濫している」とニュースで見たことがない。これが今では当たり前に見えるけれど、本来「大雨が降っても近くの川が氾濫することはないだろう」と、慢心することはできない。僕たちが今、水と共に生きている以上、水の良さと同じくらいに、怖さとも向き合わなければならぬはずだからだ。

水は、農作物を育てさせ、飲料水の供給源となり、人々に恵みを与えてくれる。その反面、水はその姿を自在に変え、恵みになることもあれば、災いとなることもある。勢いの激しい流水は、ダムによって流れが

抑えられ、自然の恵みとなる。だが、ダムの機能にも限界はある。大雨により河川の水位が上昇し、ダムが貯水できる量に限界を迎えれば、いつでも氾濫する危険性ははらんでいる。

昨年の七月、秋田県や山形県を中心とした豪雨により、両県合わせて五か所の堤防が決壊し、秋田県内だけでも九河川で氾濫が起きている。この大雨の影響で合計二人が死亡、三人が行方不明となった。

水は人に恵みを与えてくれる。だが人に災いを与えることだってある。水の動きを人間が完全に管理することは不可能であることを忘れてはならない。水が明日、僕たちに大きな災いを起こす可能性だってある。

災いばかりに目がいくが、命と水は切っても切れない関係にある。生きるためには水が必要であり、現在当たり前僕たちが水道から水を飲むことができ、水道の水で手を洗うことができているのも、水の恵みのおかげだ。そして、水の資源を守り、僕たちに供給してくれている人が大勢いることを絶対に忘れたくないし、忘れてほしくない。当たり前だと思っている生活にも、今まで多くの水に関わってきた人々の努力と知恵、そして「未来をもっと良くしたい」という善意が隠れている。

今日という日だって、その善意で世界は満たされているはずだ。いろいろな形で、僕たちはそれを受け取って生きている。生活の一部にしている。「一番身近である」とも言える、そんな水だからこそ、水を生かし、水の恵みに生きているこの世界を大切にしたい。水に関わる仕事に従事する方々に、直接感謝は伝えられなくとも、「水の無駄遣いを減らすこと」はできる。この世界をより良くしたい気持ちは、僕たちも同じだ。改めて「水とは何か」自分自身に問うてみよう。僕には、世界を繋ぐ唯一の架橋のように思えてきた。

入選

めぐる水く故郷の川を守るために

宮城県 石巻市立蛇田中学校 二年 坂本 悠維

私の夏は、ある小さな疑問を持ったことから始まりました。聞こえてくるのは、川のせせらぎ。そう、私は北上川を巡る大冒険に出発したのです。

私が父と地元である石巻市をドライブしていたときの事です。雄大な川の流れに魅せられた私は、父にこの川の名前を尋ね、北上川であることを教えてもらいました。

北上川とは、岩手県中部を北から南に流れ、宮城県東部の私が住む石巻市の追波川に注ぐ一級河川だということが分かり、ますます興味を持ちました。

調べる中で、二つの疑問を持ちました。一つ目は、北上川の水源はどこにあるのかです。二つ目は、北上川は流域によって、形状や流れ、水質が異なるのかです。実際に目で見て調べてみたいと思いました。そこで、父に頼んで、自分で調べた北上川の水源まで車で連れてってもらおうことにしました。

北上川の水源は、七時雨山麓や丹藤川、西岳山麓などいろいろな説があります。私は国土交通省が定めた水源である弓弭の泉と七時雨山麓を目指しました。車で石巻市から岩手県の源流まで川沿いを走る道のはとても長いものでした。川幅が広くゆったりと流れる場所もあれば、源流近くでは川幅も狭く、さらさらと流れている場所もありました。また、街中に沿って流れている場所もあれば、自然の中に溶け込んでいる場所もありました。それだけ北上川が長い川であることが実感できました。

私は北上川の源流を目指しながら、いくつかのポイントで水質検査を行いました。まず、身近な石巻市で検査を行いました。その結果は驚くものでした。水が濁っていて、水質も汚れているということを示していたのです。次に訪れたのは、岩手県紫波町です。石巻市と似ており、市街地に沿って流れる川でした。この水はとても濁っていて、匂いもしま

ました。水質も化学的酸素要求量が多く、とても汚れているということを示していました。美しいと思っていたこの北上川が汚れているという事実には衝撃を受けました。次に訪れたのは、岩手県の弓弭の泉です。ここは山奥にあり、周りには殆ど、住宅がありませんでした。お寺の脇にある御堂観音で採取した水で検査すると、化学的酸素要求量以外は全く汚染されていないという結果が出ました。これまでは異なり、とてもきれいな水だということが分かりました。最後に、北上川の源水である七時雨山麓です。ここは山奥にあり、青々とした木々に囲まれた自然豊かな場所でした。水はとても透き通っており、私はその水の美しさに釘付けになってしまいました。検査の結果、水質は全く汚染されていないという結果が出ました。北上川の水源は美しかったのです。

石巻に流れる北上川もこのようにきれいであったらいいなと思った私はどのようにすれば私たちの北上川をきれいにすることができるのかと考え、専門家の話を聞いてみようと思いました。そこで、北上川下流河川事務所を訪ねて質問しました。すると、下流では、生活排水や工業排水などで汚れていることを教えてもらいました。

そこで生活排水を少なくするためにできることを調べました。そこには、食器などを洗う際に、先に紙などで拭いたり、使った水をもう一度使ってから捨てたりする方法を知りました。自分にもできることだと思いました。

水は生活に欠かせないものです。だからこそ、私たちはこの豊かな水を大切に守っていかなければならないと思いました。一人一人ができることは小さいかも知れませんが、小さな源流が大きな川の流れを生み出すように、みんなで力を合わせて自分ができることをすることで、さらに美しい北上川を生み出していききたいと思います。

入選

「水」の恐ろしさ

秋田県 秋田市立岩見三内中学校 二年 小笠原 弘礎

水は美しく、時には恐ろしいものです。

私たちは水を普段の生活で当たり前のように使っています。また、僕は小さい頃に水鉄砲で遊んだり、川遊びをしたりしていました。思いっきり水を浴びて、びしょびしょになったのを覚えています。とても気持ちよくて楽しかったです。水は私にとって家族や友達との思い出でもある存在です。

水の恐ろしさを経験したのは小学校六年生の夏でした。令和五年七月に秋田県を襲った大雨で、僕が住んでいる岩見三内も大きな被害を受けました。学校のそばを流れる岩見川が氾濫し、学校が浸水しました。その時は夏休みで浸水した学校には行きませんでした。僕の家も浸水などの心配があったため、数日間避難していました。いつまでたっても降り続ける雨の影響で、時間経過とともに被害が大きくなっていき、とても怖かったです。

避難の合間に一度家に帰ると、近くの田んぼに流木があったり、川が増水していたりしました。避難しているときは、ニュースやインターネットを通して被害状況を確認しました。車や建物が水に浸かってしまっている人にとっても近付けない状態になっていました。また、スマホやテレビから、何度も大雨の警報音が鳴り、怖い気持ちでいっぱいでした。

しばらくして雨が収まった後、僕はようやく帰ることができました。幸い家屋には何も被害がなかったですが、隣まで泥水が来ていて、洪水被害の大きさを物語っているようでした。学校も浸水したのですが、夏休みが終わって登校すると、グラウンドに流木がたくさんあり、使えない状態になっていました。この夏に起こった水害は自分にとっても深く胸に刻まれる経験となりました。

この経験をもとに中学生に進級した僕たちは河川の氾濫による水害やその防災について調べました。また、実際に専門家の方に話を聞いて岩

見三内の地形はどのようなになっているのか、なぜ洪水が起こりやすいのか、など、原因について学びました。その結果、岩見三内は周りより比べて土地が低く、山に挟まれていることが分かりました。また、四方の山から集まり、流れてきた水が川や田んぼに一気にたまり、それがあふれたことよって、被害が大きくなったと考えられました。

これからも起こる可能性がある水害。もしも起こったときに少しでも被害を少なくするために、僕たちは調査したことをまとめて、具体的な対策について考えました。避難所の確認、物資の備蓄、交流活動、マイ・タイムラインの作成などについて一つにまとめました。僕たちはクラスでまとめた提言を地域の方々で構成される学校運営協議会で発表しました。地域の方々の反応は好意的で、アドバイスをもらうことができました。そこで、それらの意見をもとにさらに詳しく調べたり、改善したりしました。そして、完成したものを改めて全校生徒や地域の方々に提言しました。岩見三内の地形はどうなっていて、なぜ被害が大きくなったのか、大きな被害を出さないために、今の自分たち、地域では何ができるのか、何をすべきなのかを伝えました。

僕が暮らしている地域や町を襲った水害。その水害は大きな爪痕を残していきました。しかし、この経験は自分たちにとって将来に役立つ経験だったのではないかと思います。水は美しく美しいものですが、時には恐ろしいものにもなり、簡単に人の命や日々の生活を奪っていきます。良い思い出になることもあれば、悪い思い出にもなってしまう時もあります。しかし、水は僕たちの生活にとって欠かせないものです。水の豊かさを守りながら、僕たちが、「水」と向き合っていくことが大切なのではないでしょうか。

入選

岩見川の未来

秋田県 秋田市立岩見三内中学校 二年 石塚 愛菜

私が住んでいる地域には岩見川という、とてもきれいな川があります。私が幼稚園の頃、夏に家族と川で遊んだことが思い出に残っています。中学生になった今でも、登下校中に見るたびに心地よく、いつ見ても川の底が透けて見えるほど透明で美しい川だと感じます。

そのような、私たちの誇れる川では、毎年八月に水生生物観察会という学校行事が行われます。岩見川にすむ水生生物を調査したところ、主にカワゲラ類の幼虫を捕まえることができました。この生物は、きれいな川にすむ指標生物であることから、岩見川はとてもきれいだということが分かりました。また、調査終了後は、みんなで岩見川に対する考えを発表しました。ここでは、この美しく誇れる川を今後も私たちが保護していく必要があるのではないかと、意見が多く出されました。

そこで私は二つの提案をします。一つ目は、岩見川の美しさや環境のよさを保つため、ボランティアのグループを作り、地域の方々と協力して岩見川周辺で清掃活動を行うことです。そうすることで、地域住民の交流も深まり、岩見川の自然環境や美しさを自分たちで守り続けることができると思います。

二つ目は、私たち岩中生が行った「水生生物観察会」を岩中生だけではなく、家族や地域の方々、専門家の方と一緒に試してみてもどうかという提案です。そのことによって、今まで以上に多くの人に岩見川のよさを知ってもらえる機会になり、川や水の大切さに興味をもってもらえるのではないかと考えました。そして、地域全体で川や水を大切にしようという気持ちにより高まる可能性があることに私はとても心を弾ませています。

また、川で起こる洪水も水について考える上で、とても重要なことです。令和五年七月、私が小学校六年生の時のことです。何日間も激しい大雨が続き、休校になるほどの危険な状態になりました。そんなある日、

用事があって家族と家を出る際に、水位の上昇した岩見川を目にしました。すると、あんなに透き通るほどきれいで、いつ見ても心地よい岩見川が茶色く濁り、流木が転がり、川周辺が荒れているという光景を目の当たりにしました。変わり果てた岩見川に私は初めて水の怖さを感じるようになりました。

水は生きていく上で本当に必要不可欠なものです。例えば、日本人の主食であるお米作りには多量の水が必要です。一方で、水は、何もかもを飲み込むほど、大きな力を秘めていることを改めて知りました。だからこそ、これからは水の怖さを理解した上で、適切な扱いをすることが重要だと私は考えます。

このような経験から、私が中学一年生の頃、地域の方で構成される学校運営協議会や学校祭などで水害防災への提言を発表しました。自ら住んでいる地域の地形について調べたり、水害発生時の避難経路や対策などについて考えたりしました。実際に調べたところ、岩見三内中学校は川と川が交わる地点に位置することが分かりました。また、元々高い位置に住宅があり、避難をしないという判断をする人が多いということも分かりました。大きな水害が起こった際は非常に危険だと言えます。私は、今後水害が起きても誰もがスムーズに避難できるようになっていくと考えます。そして水害は、いつ起こるか分からないので、地域の避難訓練を実施する必要性を多くの人に広めたいと考えています。

これから私は、このような経験をしたいからこそ、自ら率先して水や川に関りをもっていくことを大切にしていきたいです。そして、水害の記憶を忘れず、水に対しての意識を高め、岩見川の水を大切にすることをともに継承すべきだと考えています。

入選

私たちの水と森

茨城県

茨城大学教育学部附属中学校

三年

大越

玲舞

水は、目には見えない場所で生命を支え、いろいろな場所を巡りながら世界を形づくっている。私は幼い頃から、その大切さを自然と学んできていた。

父が林業に携わる仕事をしていることで、森は身近で特別な存在になった。父が山に植える苗木は、やがて木々へと成長し、森を造り、水を守る。その役割を理解するにつれ、私は森と水の循環に対する想いを深めていった。

森は水を育む。雨が降り注ぎ、木々の根がその水を受け止め、ゆつくりと地中へ送り込む。そして、蓄えられた水は、やがて川となり、湖となり、人々の暮らしへとつながる。父の仕事は、ただ木を育てるだけではなく、この循環を維持し、豊かな水を守るものだった。「間伐を行うことで森は健全な状態を保ち、過剰な水流を防ぎながら、ゆつくりと生命を育む。」私が間伐体験をした時に、父はそれを当然のことのように話し、私はその言葉を聞きながら、森の営みを身近に感じていた。

私が住んでいる水戸市もまた、水と共に歩んできた土地である。街を流れる那珂川、穏やかに広がる千波湖。特に千波湖は、私が小さな頃からずっと遊び場にしていた場所だ。

しかし、ある頃から夏になるとドブのような異臭がするようになった。なぜ、そんな風になってしまったのか、私は悲しくなり調べていくとアオコに辿り着いた。そして、アオコが発生してしまうのは、水の循環が悪化していたためだと解った。

そもそも千波湖は、徳川光圀公（水戸黄門様）の偉業の一つで、歴史書には、千波湖の整備や治水工事を行い、水戸藩の民衆の生活を守るために水利事業を推進した、と記述されている。千波湖は水戸藩の重要な水源であり、その水は農業や生活に欠かせなかった。しかし、水の循環が悪化すると水質が低下する。この問題を防ぐため、光圀公は治水工事

を行い、水の流れを改善した。また、堤防を整備し、洪水から民衆を守った。光圀公の施策により、千波湖の水は長く利用され、水戸藩の発展に寄与した。光圀公の水に対する深い理解と民を思う心は、今も語り継がれている。

現在、茨城県と水戸市は、共同で千波湖導水事業に取り組み、那珂川から水を桜川へ、そして桜川から千波湖へ送水し、最大一秒間に三トンの水を流すことで、水の入替えを行い、水質の改善をしている。このように、今でも市民の生活のために水の課題に取り組んでいることが分かった。

そんな水と森のつながりを、私はある日、実際に体験する機会を得た。水戸市森林公園で行われた植樹祭で、父と一緒に針葉樹・広葉樹の苗木を、土を掘り、根を広げて、植え付けを行った。思ったより暑くて大変だったため、今でも鮮明に覚えている。そして、「この木が大きくなれば、森がもつと豊かになり、水と共に自分たちの生活も豊かになるよ」と父が言った。その言葉を聞いた時、私は目の前の小さな苗が明るい未来へと続く道を切り開くような気がした。

森は水を守り、水は命を支える。水戸市森林公園の植樹祭や間伐体験に参加して、ただ木を育てるだけではなく、その営みは、私たちの暮らし全体を支えるものだと思った。私が小さい頃から知らず知らずのうちに感じていたもの、水と森のつながりを、この作文を通じて強く、はっきりと感じることができた。

入選

ダムを通して考えたこと 栃木県 栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校 二年 金 悠俊

この夏休み中家族でダムの建設現場を見学する機会があった。間近でダムを見ることはあまりないので、想像以上に大きくとても驚いた。橋の上から見た景色は圧巻だった。とても強い日差しの中で働く工事現場の人達を見て、大変だなあと思った。

ぼくが住む鹿沼市に建設中の南摩ダムは、一九六九年から工事が計画され、二〇二五年に完成が予定されている高さ八六・五メートルのダムだ。黒川や大芦川と南摩ダムとを導水路で結び、河川の水が多いときはダムに水を貯め、水が少ないときはダムから河川に水を補給することで、効率的に水資源の活用を図っている。また、ダム下流の南摩川や思川の河川の水が少ないときにもダムから河川に水を補給することができるそうだ。今までダムについて考えたことがなかったので、調べてみることにした。

今回、南摩ダムを建設している思川開発事業は、河川の洪水被害や水不足に対処するための三つの役割を担っているそうだ。一つ目は治水だ。治水とは被害を防いだり、運輸の便をはかたりするために、水流、水路の整備・改良・保全を行うことである。南摩ダムは、ダムへ流れてくる水量毎秒一三〇立方メートルのうち、毎秒一二五立方メートル、東京ドーム約四杯分を貯め込み、下流には毎秒五立方メートルだけを落下させる。こうすることで下流河川の増水や洪水を減らすことができる。それによって、近年増えている大雨の被害から私たちの命や生活、財産を守るができる。

二つ目は、利水だ。利水とは、田んぼや畑などに水を送り届けたり、生活するための水を用意したりすることである。南摩ダムが建設されることで、栃木県、鹿沼市、小山市、古河市、五霞町、埼玉県及び千葉広域水道企業団の水道用水として、最大で毎秒二・九八四立方メートルを新たに供給することができる。ぼくが毎日何気なく使っている水道水も、

たくさんの人達の努力によって届けられているのだなあと感じた。

三つ目は、流水の正常な機能の維持だ。南摩ダム及び導水路によって、農業などにおいて、河川からの取水が既に認められている用水である既得用水の安定化及び河川環境保全などのための流量の確保を行い、渇水による瀬切れを解消することができる。瀬切れとは流水が途切れてしまいう状態のことであり、瀬切れが起きると生物や漁業、景観、レジャー等に悪影響を及ぼしてしまう。このように、既得用水や河川環境などのための水を補給する働きをダムは持っている。

今回、ダムの建設現場を見学したことで、今まで考えたことのなかったダムのことについて調べて、学ぶことができた。ダムはあまり身近に感じていなかったが、自分の生活と深く結びついていることが分かった。改めて考えてみると、水は朝起きてから夜眠るまで毎日必ず使う、なくてはならないものだ。ぼくも朝、顔を洗ったりお風呂に入ったりするのに使っている。他にも、毎日の食事や飲料水、トイレにも使われている。もし水がなかったら、これらのことは全て行うことができない。そう考えると、水はとても大切なものだと思えることができる。水は、洪水などの自然災害で人々に影響を及ぼしてしまうこともあるが、今回調べたダムのように私たち人間が水を上手にコントロールすることによって、自然災害を未然に防ぐことができる。そのように、多くの人々の働きによって、ぼくの生活が支えられていることが分かった。ぼくたちの生活に欠かせない水をこれからも大事にしていきたい。また、ぼくも、水と人とのよりよい関係を保てるように、自分たちに何ができるか考えてみたい。

入選

大好きな水辺を取り戻すために

東京都 東京女学館中学校 三年 竹内 杏

私が思い浮かべる水は、ダイヤモンドのようにキラキラと輝く、冷たく澄んだ神奈川県秦野市の美しい川の水だ。そこで生まれ育った父は、私が幼い頃から夏に川遊びに連れて行ってくれた。丹沢山地や渋沢丘陵の森から流れ出る水は、「名水百選」にも選定されているほど透き通っており、潜るとたくさんの小さな生き物を見ることが出来る。川の流れる身をまかせていると、自然と一体化した感覚に陥る。私にとって、秦野の川は、日々の慌ただしい生活から離れ、心を落ち着かせてくれる魔法のようなものだ。しかし地元の横浜の住宅街を流れる川は、残念なことに悪臭のする濁った川で、ペットボトルや空き缶などのゴミが多数落ちている。

私は小学生の頃、「水は生命の源である」とことと水をめぐる問題について学んだ。水は体内の化学反応や栄養の循環、温度の調節など生命にとって不可欠であるとともに、水環境の悪化によって一部の生き物が生きられなくなり、やがては生態系全体に影響が波及するということを知った。また、最近クロースアツプされているマイクロプラスチック問題も同様に、食物連鎖の過程を経て生態系に悪影響を及ぼしてしまふ。私の住む町の水辺の生き物たちが環境の悪化で傷つけられていると知ったとき、胸が苦しめられた。そして何か自分でもできることはないかと考え始めるようになった。

それがきっかけで、私は小学六年生の時に地域の仲間が行っている、川・町清掃に参加するようになった。ペットボトルや空き缶、タバコなど小さなものだけでなく、不法投棄と思われるような家具、電子機器や工業部品なども多く見つかる。そういうものを拾っていると、怒りと悲しみでやるせない気持ちになる。今では私も含めた中学生五名を中心に、子ども連れや大学生など、地域のメンバー三十名ほどで月一回活動しており、その度にゴミ袋十個分もの「収穫」がある。

とはいえ、この活動には限界がある。私の住んでいる場所よりも上流にはいくつもの町があり、多くの人の生活がある。上流から流れてくるゴミや生活排水を止めることはできない。秦野のような山から流れ出る川の水とは環境的に違うことは分かっている。

昔こんな話を聞いたことがある。落書きや犯罪に困っていたニューヨークでは、きれいなものは汚そうとしないという人々の心理に期待して、街中の落書きを全て消す取り組みをした結果、街の風紀や治安が改善したらしい。これと同じように、ゴミのない川や町を見れば、ポイ捨てをしようとする人はいなくなるのではないか。そして、川・町清掃をしている姿を見れば、町の人たちの意識や行動を変えることにつながるのではないか。私の活動は、流域の一地域で月一回ゴミを拾うだけに過ぎないが、それでもその活動に意味があるものだと私は信じている。少なくとも、私の地域からはゴミを新たに出不さない、下流に住む人や水の生き物に迷惑をかけたくないという信念で活動をしている。

水は生態系にとって不可欠であると同時に人々や地域に潤いや安らぎをもたらすものだと思う。川の本来の姿をみんなの力で取り戻すため、今後は川の上流や下流にも視野を広げ、その地域の人々とともに清掃活動をしたい。また、私は生態系や水の問題について知らないことが多いため、本を読んだり、セミナーで専門家の話を聞いたりして、より良い解決策を探りたい。

入選

綺麗な水を保つために

東京都

和洋九段女子中学校 二年

伊藤 由希

「え！下水道がない？ってことは、生活用水や汚水は海へそのまま流しているの？」

春休みに初めて西表島に旅行に行った時の事です。ホテルは、よくあるシャンプーやリンス、ボティソープがひとつになったオールインワンソープが一つだけ置かれていました。ボトルにはそれ一つで顔・体・髪など全身を洗うことができ、地球にもやさしい生分解性の高いアミノ酸系洗浄成分を採用と書かれていました。また、生分解性の低い成分を含んだ排水は、浄化槽の処理に負荷をかけ結果的に土壌汚染の原因となり環境に悪影響を及ぼす要因となりますと書かれていました。普段、下水道は当たり前のようにどこにでもあると思っていたので、とても驚きました。西表島などの離島では下水道が整備されておらず、生活排水は各建物が浄化槽を設けることで海に放出して問題ないレベルまで浄化されていることがわかりました。ホテルなどの規模の大きい施設ではできる限り浄化槽の負担を減らせるよう排水の質を考えていく必要があり、このオールインワンソープが開発されたことも知りました。西表島で過ごすことで、普段はあまり考えることがなかった下水について考えるきっかけになりました。下水には各家庭から出る生活排水の他にも工場や事業場排水、雨水などの自然排水があるそうです。そして、下水には、汚水処理してきれいな水にし、川や海に流すことで生態系も守っているそうです。下水がない西表島は、浄化槽でこの下水の役割の代わりをしているのです。西表島の豊かな自然や生き物について学んだり、実際に川でカヤックや滝を見に行ったりすることで、ますますこの豊かで美しい自然がいつまでも続いてくれるといいなあと思うようになりました。そこで、私にも何かできることがないか考えてみました。まずできることは、食べ残しや飲み残しを減らすということです。調味料もかけすぎに注意し、お皿を汚さないように工夫したいです。これは今から

でも出来ることです。また、油をそのまま流さないことも大切です。もし皿に油がたっぷりついていたら、新聞紙やペーパーに吸収させてから洗うように心がけたいです。洗剤やシャンプーの量も多くつけすぎないようにすることも大切です。また、調べてみると、トイレではトイレトペーパーの量が多いと汚れを浄化する微生物がうまく働くことができないと書かれていたので気を付けたいです。また、米のとぎ汁は庭や畑にまくと植物の栄養物となることを初めて知ったので実行してみたいと思います。以上のように、水を汚さない工夫は実は身近に沢山あり、すぐに実行できそうなことばかりであることがわかりました。友達にも伝えて、皆で実行していくことができれば良いなあと思います。西表島にある、沖縄県最大落差五十五メートルのピナイサーラの滝に行く機会がありました。カヤックでピナイ川を上り、トレッキングをして訪れました。巨大な滝が突然目の前に現れたときは本当に圧巻でした。この滝の水は主に雨水であり、ゆっくりゆっくり山に染み込んで川に流れているとガイドさんから聞きました。まさに水の循環を感じる瞬間でした。西表島にいと、様々な野生動物が沢山おり、人間はその生き物の中のごく一部であることに気づかされました。人間の勝手なふるまいで、生態系を壊していいわけがないと思いました。川や海を汚すのもきれいにすることも、人間の心がけ次第だと思えます。この気づきを大切に、これからきれいな水を守るように努力していきたいです。

入選

未来の海を守るために

三重県 高田中学校 二年 水谷 真菜香

私は家族と一緒に大阪・関西万博を訪れた。万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」で、私たちは、未来を想像する多様な体験ができた。その中で、私が最も興味を持ったのは、海に関する展示だった。

「Blue Ocean Dome」というパビリオンでは、海洋保全がテーマとされていた。現在の地球の海は、魚礁の減少や海水温の上昇、気候変動による大規模な災害、そしてプラスチック汚染など、さまざまな問題に直面していることが分かった。こうした問題が起こっていることは以前から少しは知っていた。ウミガメがビニール袋をクラゲと間違えて飲み込んでしまうというニュースを見たときは、とても悲しかった。パビリオン内では、大きなスクリーンに、地球の海の豊かな生態系や色とりどりの魚たちが映し出されていて、本当に美しかった。しかしその一方で、海の中に増え続けるプラスチックごみの様子も鮮明に映され、私の想像をはるかに超える深刻な現状を目の当たりにした。

世界中の海には毎年八百万トン以上のプラスチックごみが流れ込んでいるそうだ。これは、東京ドーム約千個分の重さに相当するという。このままの状態が続けば、二五千年には海のプラスチックごみの量が、魚の量を上回るという試算もある。きれいな海が二十五年後にはプラスチックだらけになり、そんな海で泳ぐことになるなんて、とても悲しく悔しい気持ちになった。

なぜプラスチックごみが年々増えているのか、自分で調べてみた。原因としては、人口増加による商品の消費拡大、使い捨て文化の広がり、リサイクルの課題などがあつた。リサイクルには、分別の難しさ、技術の限界、インフラの不足、そして消費者の意識の低さなどの多くの問題があることも分かった。消費者の意識を高めるためには、正しい分別知識や情報を増やし、関心を高め、習慣化することが解決につながるのではないかと考えた。

万博では環境問題への取り組みも重要なテーマの一つとなっており、ごみの分別も細かく行われていた。再生可能なペットボトル、キャップ、かん・びん、紙類、プラスチック、そして再生できない飲み残り、燃やすごみ、燃やさないごみに分けられていた。ごみを捨てるときには少し手間を感じたが、一か所にすべての分別用ごみ箱がそろっていたため、迷わず分別することができた。またリサイクルの過程が見られるGRコードの設置もあり、まさに自分が考えた解決策につながる取り組みが実践されていた。

オーストラリアパビリオンでは、前方、側面、天井が複数のスクリーンで囲まれ、まるで海の中にいるような感覚を味わえた。ウミガメやエイ、クジラなどが、きれいな海の中を元気いっぱい泳いでいた。色鮮やかなサンゴ礁などの自然も美しく、感動して胸がいっぱいになった。私はそこで、「この美しい海を守らなければならない」と強く思った。

私もこれから身近なことから意識して取り組んでいこうと思う。たとえば、私の住む市ではペットボトルのキャップはプラスチックごみとして出すことになっているが、これからはリサイクル資源として回収している場所に持っていくように思う。また、犬の散歩のときには道に落ちていくごみを拾っているが、休みの日にはいつもと違う道を通って、もっと広い範囲でごみを拾ってみようと思う。さらに、リサイクルの大切さや環境保護について、身近な人たちにも伝えていきたい。

私は大人になったら、実際にオーストラリアの美しい海に潜り、きれいなサンゴ礁や魚たちを自分の目で見てみたい。その夢を叶えるためにも、今から環境に配慮し、未来の海を守る行動を続けていこうと思う。

入選

水の歴史に思いを馳せる

三重県 高田中学校 二年 渡辺 心晴

今年もこの季節がやってきた。去年の夏、私は地元の地域を守る「蓮ダム」を見学し、ダム湖の巡視や水質調査・点検を行いながら職員の方とお話しをする貴重な機会を得た。蓮ダムを訪れる前に、祖父より聞いた話が印象深かった。曾祖父は元々、三重県飯南郡飯高町青田という所に住んでおり、林業で生計を立てて暮らしていた。しかし昭和三十四年にこの地域を襲った伊勢湾台風の影響で、この地域の治水計画が始まり、蓮ダム建設を機に、ダム下流の飯高町森の犬飼という地域に移転した。最終的に青田地区・蓮地区・猿山地区の192戸が移転をした。計画では、曾祖父の生家は家の軒に水がくる位置にあり、裏にある先祖代々の墓も水に沈むということだったそうだ。はじめ地域住民はダム建設に反対していたが、同じ三重県南部地域の水資源である宮川水系には既に宮川ダムがあり、ダムの洪水調節により伊勢湾台風の洪水被害を最小限に食い止めていた。そのため甚大な被害を受けた榎田川水系にもダムによる治水計画は必須だった。こうして曾祖父の生家は蓮ダムの底に沈んだわけだが、その時の気持ちを祖父に聞いてみた。「おやじの生家がダムの底に沈んだのはさみしいが、地域の安全のためには仕方がなかったんやろうな。今でも墓参りにいくと思い出す。」と話してくれた。現在お墓はダム湖の脇の土地にお骨と墓石を移したそうだ。

同時に私も思い出したことがある。小学校五年生の時に、同じ飯高町にある現在は廃校になった波瀬小学校にデイキャンプへ訪れた。目の前を流れる波瀬川でアマゴの掴み取りをした。水中ゴーグルでのぞいた川の中はとて透き通っていて、遠くまで見えたことを今も鮮明に覚えている。あの時の透き通った水も、今日の前のコップに入っている水も、蓮ダムで育まれていると気づいた。何だか不思議な気持ちだ。蓮ダムの底に沈んだ村の人々の生活。それは十三歳の私にとってはとても遠い過去の記録だと感じる。しかし蓮ダムのおかげで大切な水や安全な暮らし

が今ここにある。そう考えたら蓮ダムを通して過去と今が繋がっているように感じた。見たこともない曾祖父の生家が懐かしく想え、タイムスリップしてお礼を言いたい気持ちになった。

去年蓮ダムの職員の方とお話する機会をいただいた時、「なぜダムを守る仕事を選んだのですか？」と質問した。職員の方はダムには水害から地域を守る・水力発電・水田などへの流入機能の維持・水道用水の供給という大切な役割があることを教えてくれた。そのうえで、「自分がこの南勢志摩地域の水の供給と安全を守っているという大きな責任にやりがいをもって仕事に臨んでいます」と教えてくれた。今私の目の前にはコップの水に、ダム湖職員の方の思いが注がれた気がした。

過去・現在そして未来へと、いつの時も私たちにとって身近にあり大切な水。ふとこの水の歴史に思いを馳せる日を、これから私は「水の歴史に思いを馳せる記念日」に制定し、あらためて水の恵みに感謝しようと思う。

入選

未来へ繋ぐ水

私は、田んぼのある風景が大好きです。春には田んぼに咲き乱れる草花の上をモンシロチョウが飛び交い、夏には水面に映る朝日や夕焼けがとても美しく見えます。秋には、水の恵みを受けて育った稲穂が、黄金色に輝いています。そして冬には雪が積もり、一面が白銀の景色に包まれた田んぼは、まるで別世界のような美しさです。

これらの風景は、すべて水がもたらしてくれるものです。しかし、最近では米作りの担い手が減ってきていると聞いています。私が住んでいる家の周りも田んぼがどんどん減って住宅が建つようになってきており、寂しく思うのと同時に、田んぼと水は作物のためだけでなく、日本の豊かな風景をつくる上でも欠かせない存在なのだと感じています。

そしてもうひとつ、田んぼと水の大切さを実感した体験をしたことがあります。それは、小学五年生の授業で体験した田植えです。その日は夏らしい青空で、初めての田植えにわくわくしていたのを覚えています。しかし、いざ水の中に足を入れると、ひんやりとした冷たさが身体中に伸びていく感覚を覚えました。さらに、土の混じった水の匂いが田んぼらしさと夏の始まりを実感させ、これから植えた苗が水の恵みを受けて成長し、秋には私たちが食べるお米として実るのかと思うと、感動もより深まりました。

稲はその後すくすくと育ち、秋には見事な黄金の稲穂が実りました。自分の手で植えた苗が実をつけ、それを収穫できた喜びは、これまで感じたことのない感動でした。そのお米を持ち帰り、家族に食べてもらったときのことにも忘れられません。「美味しいね。」と言われたとき、私は自分が田植えに参加し、水の恵みがあったからこそ、こんなにおいしいお米ができたのだと、心からうれしく思いました。

田植えの時、指導の方から、田を満たす水は山や湖やため池などが

滋賀県 近江兄弟社中学校 一年 林 咲和

ら引いてくること、その水もきれいでなければならぬことを聞き、私は自然が互いにつながり、どれか一つでも欠けてしまうと、成り立たないことに気づきました。たとえば、山の木が減少すると雨水が十分にろ過されずに汚れた水が田んぼに流れこみ、稲の成長に悪影響を与えてしまうのだそうです。水は単に川や田んぼにあるものではなく、自然全体のつながりの中で成り立っていることを学びました。これらのことを通じて、私は自分も水を大切にしようと思うようになりました。

水が汚れると川の魚たちが生活できなくなったり、それを食べる鳥や動物の数が減ったりして、自然のバランスが大きく崩れてしまいます。さらに、その魚を食べる私たち人間にも健康への悪影響が及ぶことがあります。水の汚染は目に見えづらくても、少しずつ環境や生活に影響を与えてしまっています。

これらのことから、私は日々の生活の中でできることを心がけたいと思います。たとえば、手洗いや洗顔をするときには、水を出しっぱなしにせずにこまめに止めることができます。食器洗いの際には、水を流し続けるのではなく、桶に水をためてまとめて洗うことで、無駄な水の使用を減らすことも効果的だと思います。

さらに、水を汚さないようにすることも重要です。例えば、油がついた食器や絵の具のパレットなどは、先に紙で拭いてから洗うと排水溝に汚れが流れるのを防げます。また、食べ残しを減らし、生ごみはしっかりと分別することも、水の汚れを防ぐ方法の一つです。

自分一人ですることができることは少ないかもしれませんが、水への感謝の気持ちや、水を大切にするという思いを身の回りの人と共有し、行動につながっていくことで、安心安全できれいな水を未来に繋げていきたいと思います。

入選

水について考える

京都府 京都先端科学大学附属中学校 三年 山本 栗央

私たちの生活に、水はなくてはならないものです。顔を洗うとき、喉が渴いたとき、料理や洗濯、トイレに行くときなど、私たちは一日に何回も水を使っています。しかし、その水がどこから来て、どんな風に運ばれているかを考えることはあまり多くありません。私は、農家をしている祖父の手伝いを通して、水の大切さを実感するようになりました。祖父の田んぼでは、川から水を引いてお米を育てています。夏になると、気温が高く、水がすぐに蒸発してしまうため、祖父は毎日水の様子を見に行きます。水が足りなければ稲が弱ってしまい、秋の収穫に大きく影響してしまいます。水は、作物にとつても命を育てるために欠かせないものなのです。そんな祖父から「琵琶湖疏水」という水路の話聞いたことがあります。これは明治時代に滋賀県の琵琶湖から京都へ水を引くためにつくられた水路です。当時の京都は、都が東京に移ったことで活気が無くなっていました。さらに、水不足や火事が多く、町の生活はとても不便でした。そこで、琵琶湖から水を引くことで京都の町を助けようと考えられたのです。琵琶湖疏水は、大きなトンネルや水門をつくるなど、当時としてはとても難しい工事でした。しかし、沢山の方達の努力によって完成し、京都の人々の生活を大きく変えることが出来ました。疏水は水道や防火用水として使われただけではなく、工場でも利用され、町の産業の発展にもつながりました。中でも凄々と思ったのは、疏水の水を使って「水力発電」が行われたことです。水の流れを使って電気を作り、その電気で電灯や電車が動くようになりました。これは日本で初めての事業用水力発電で、明治時代の京都にとって大きな進歩でした。私は祖父と一緒に実際に琵琶湖疏水を見に行ったことがあります。水は今でも静かに流れていて、まわりには木々がしげりとても気持ちのいい場所でした。祖父は「昔の人の知恵と努力には、頭が下がるなあ」と言っていました。私も、自然の水をどう使うかを真剣に考えていた昔の方

たちに、尊敬の気持ちを持ちました。しかし、今の時代でも水は無限にあるわけではありません。世界には、綺麗な水を手に入れることが出来ない人たちが沢山います。私たちが当たり前のように使っている水は、とても貴重なものなのです。だから私は、水をこれまで以上に大切にしたいと思っています。歯磨きのときに水を流しっぱなしにしない、お風呂の水を洗濯に使う、川にごみを捨てないなど、小さなことでも水を守る行動になると思います。祖父は雨が降ると、「今日はええ日やなあ」と笑います。私たちにとつてはうつとしい雨でも、農家にとつては作物を育てるための大切な恵みなのです。自然の水に支えられていて私たちの暮らしは成り立っていることを、祖父を見てくると強く感じます。琵琶湖疏水を作った人々、自然の水で作物を育てる祖父、そしてその水を毎日当たり前のように使っている私たち。みんな水でつながっています。私はこれからも、水の大切さを忘れずに、感謝しながら生活していきたいと思えます。

入選

益虫

大阪府 大阪府立水都国際中学校 三年 西海 奏

耳元で羽音がした。飛び起きて、あたりを見渡すがどこにも見当たらない。そんなことをしている間に足に痒みを感じて、血を盗んでどこかへ逃げ去った泥棒を疎ましく思う。誰もが経験する夏の風物詩といっても過言ではない。

一年間で、地球で最も人間を殺している生き物を知っているだろうか。蚊である。WHOなどの統計をもとに作成された図では、二位である人間と二十五万人の差をつけて、蚊が七十二万五千人もの命を奪っている。この背景には、蚊が感染症の媒介生物であることが挙げられる。主な感染症には、デング熱やジカウイルス、原虫疾患であるマラリアなどがある。これらに感染した人の血を吸った蚊が、別の人を刺すことで、次々とウイルスを広めていくのだ。

私達人間にとって、蚊は害虫で生命を脅かす天敵のような存在であるが、水にとってはそうではない。吸血性を持つメスの蚊は人や動物の血を吸い、卵巣を発達させ、川や湖の近く、水たまりといった水辺に卵を産み付ける。その卵から孵るのが幼虫のボウフラである。ボウフラはエサとして、水中のプランクトンや生き物の死骸、排泄物といった有機物やバクテリアを食べて育つ。普通、水中の有機物はバクテリアが分解することが多いが、その場合バクテリアの排泄物によって水が汚れてしまう。それと同時にバクテリアが大量に発生すると、水中の酸素が消費されてしまい、生き物が住めなくなるといった問題点もある。これらの両方をボウフラが食べるため、水を浄化し、川や湖といった私達の水源を清潔に保ってくれているのである。また、私達が汚した不衛生な排水溝の水も浄化しているのだ。これに加え、夏に町のあらゆる場所で見える蚊柱も、水の浄化に役立っている。蚊柱といっても、蚊とは別の昆虫のユスリカであり、吸血性はない。ユスリカもボウフラと同様、幼虫のときに有機物などを食べ、水質の向上に貢献しているのだ。つまり、水にとつ

て蚊やユスリカといった生物はなくてはならない「益虫」なのである。

対して、私達は水にとつての「益虫」になれているのだろうか。私は人間は益虫ではない、一番の害虫であると考ええる。なぜなら、川や海などの水が汚れる主な原因は、日常生活の営みから出される生活排水だからだ。生活排水は排出源が小規模であり数も多いため、規制が難しく効果的な対策を見いだせずにいる。現状、一番の有効手段は私達が意識し、行動に移すことである。例えば多くの人にとって、川にゴミを捨てるのは悪いことと判断するのは容易である。しかし、お米のとき汁や使用済みの油を排水口に捨てるのも、悪いことと判断できる人は少ないのではないだろうか。こういった日常生活で、私達が知らずに行っている水を汚す行為は沢山ある。それと同時に、意識すると水を守る行為も沢山あるのだ。それらをきちんと理解した上で、行動することができれば、生活排水による汚染は少しずつでも減っていくのだと私は信じている。

蚊は人間にとって一番の害虫だ。一方で、はるか昔人類がまだ地球上に現れていない頃から、現在と同じ姿で存在している。ずっと吸血をし、卵を産み、水を浄化してを繰り返す、今まで生命を受け継いできた。この姿には私達も見習うべき点があるだろう。もうすぐ蚊が繁殖を始める季節。ボウフラはせっせとエサを食べているのだろうか。羽音で飛び起

入選

歌枕の浜をもう一度

大阪府 大阪府立水都国際中学校 三年 八木 美薫

「うちの市には、百人一首にも詠まれた砂浜があること、皆は知ってる？」。小学生の時に先生に問われ、私は初めて自分の住む市に砂浜があると知った。「高師浜」と呼ばれるその浜は、昔は白砂と青松で有名な美しい海水浴場だったという。百人一首が好きな私にとって、その話はとても印象的で心に残っていた。今は漁港になっていて泳げないと知ったときは悲しかったが、どんな所なのかずと気になっていた。

ある日、その漁港でスケッチをする授業があった。意気揚々と漁港に足を踏み入れた私は、浜辺を見て驚いた。波打ち際にはたくさんのごみが打ち寄せられ、かつて歌に詠まれた美しい海岸の面影がなかったのだ。海の水も濁っていて、釣り具が浮いていた。私は浜辺の様子が気になったが、先生に波止場の方へと促され、砂浜には近づけなかった。この出来事はずっと私の心の中でぐるぐる渦巻いていた。

だから、高師浜で海岸活性化イベントがあると知ったとき、私は迷わず参加を決めた。イベント当日、漁港に行くときたくさんの方がトングを持ち、砂浜や磯のごみを拾っていた。そして、驚いたことに砂浜はあの日よりも少しきれいになっていたので。後から知ったことだが、私が活動に参加する前から何度か行われて海沿いの清掃や、浜にきれいな砂を運び込むなどの取り組みが行われていたそうだ。地元の水を守ろうと活動する人がたくさんいることに私は感銘を受け、慌ててトングとごみ袋をもらって自分も清掃を始めた。

ごみが以前よりは少なくなったと言えど、あれよあれよという間に三十リットルのごみ袋は膨らんでいった。ペットボトルやお菓子の袋、中にはゴルフボールまで。岩と岩の間の小さな隙間にもごみが落ちていて、拾えないものもあった。フジツボがついた。ペットボトルも拾った。プラスチックの分解に長い時間を要することは知っていたが、誰かが軽い気持ちで捨てたごみがずっと自然の中に残り続けることを実感し、私たち

が負うべき責任の重さを感じた。清掃が終わると、砂浜にはパンパンになったごみ袋の山ができていた。私が拾ったごみはそのほんの一部だったが、地域に貢献できたことが誇らしかった。

ごみ拾いの後にはアマモを移植した。アマモは「海のゆりかご」と呼ばれ、魚の住処になったり、水を浄化したりしてくれる植物だ。スタッフの方に聞くと、アマモは暗く涼しい環境を好む繊細な生き物なので、いくつかの団体に協力し苦労しながら育てたという。今は小さなそれが、一メートルほどに成長して多くの生き物が暮らす家になる、というのはとても素敵なお話だった。

私はこの経験を通して、私たちに水を届けてくれる自然をきれいに保つことの難しさに気付いた。水をきれいにしようと動く人がいても、水を汚す人がいる限り、この問題は解決できない。調べてみると、二〇五〇年には海洋プラスチックごみの量が海にいる魚の量を上回るという予測もされているそうだ。生物濃縮といって、海水に混ざったマイクロプラスチックや有毒成分が魚などに蓄積されると、それを食べる人間にも悪影響が巡ってくる。海や川で暮らす動物だけでなく、この水の惑星に住む生き物すべてにとつて、水は単なる「飲み物」ではなく、「住処」だ。私たちの住処を守るため、私も清掃活動が続けることはもちろん、環境に優しい洗剤を使ったり、ごみの分別をきっちりしたりするなど、自分にできることをしたい。

海岸活性化イベントの最後に、キジハタの稚魚放流を行った。稚魚と高師浜の海に呟きながら、私はバケツの中の小さな命を海へと放った。

「元気に育ってね」

入選

水と人間の共存

兵庫県 兵庫教育大学附属中学校 二年 上田 悠智

僕は保育園児の頃にアメリカに行った。その時に大伯母から「水道水を飲むな」と言われた。日本では水道水を飲んでもいいのになぜアメリカでは飲んではいけないのかと僕は今になって思った。調べてみると配管の老化、水質汚染などで飲めない場合があると分かった。アメリカは地方によって水の安全性が違う。そう考えると日本は素晴らしい国だ。安全な水をいつでもどこでも飲むことができるからだ。そこで僕は「日本はなぜ安全な水道水を飲むことができるのか」と考えた。日本は厳格な水質処理や徹底的な浄水処理、インフラ整備などを行っているからと分かった。水処理では沈殿やろ過を行って不純物を除去し、塩素消毒で病原菌を殺菌し、水質管理は残留塩素の濃度が基準を超えないように厳しく管理されている。このようにして日本は安全な水を作っているから水道水が飲める。

先日、ラーメン屋に行った際にすぐに水が無料で出された。しかしアメリカのレストランではそのようなことは無く、水を注文しなければいけなかった。飲み水の値段はコーラやサイダーより高い。大伯母が住んでいるサンフランシスコの近くはもともと乾燥しており水の値段が高くなっている。サンフランシスコには川が無いと兄から聞いた。ヨセミテ公園というところから水を運んでいるそうである。サンフランシスコからヨセミテ公園の距離は東に約三百キロ離れている。そのため水を運ぶのにたくさんのお金を使う。だから水の値段が高いそうだ。大伯母はそれでも風呂の水を沸かしてくれた。お風呂に浸かる事が大好きな僕たちはとても嬉しかった。

大船渡で山火事が発生し、空中消火などを行っていたが、アメリカのカリフォルニア州は山火事が起きても近くに住宅地が無い限り消す事はなく自然消火を待つ。しかし今年の一月に起きた山火事では近くに住宅地があったため火を消そうとした。しかし近くで使える水が少なかった

ため住宅地も燃えてしまった。とても不幸なことである。

この経験から考えると日本はやはり水が豊富である国だと感じる事ができた。しかし中にはそうではない国がある。アフリカなどの乾燥している地域では、少量の不衛生な水を得るために六時間以上病気の体で歩かされることがあるのだ。さらにその水が原因で病気や伝染病が起き、毎年いくつもの若い命が刈り取られている。そんな日本も江戸時代では兵庫県の干ばつで水不足が起きたため、幕府は淡路島や加東市などにたくさん溜め池を作って水不足を解決した。日本でも水の有効利用ができなかった時代があったのだ。

千九百四十一年のマレー大戦の時、日本軍はイギリス軍のマレー半島にある本部に繋がっている水道を破壊した。その際イギリス軍は水不足によって士気が低下した。さらにアフリカでは井戸をめぐって戦争が起き、最終的には井戸を破壊するはめになった地域もあった。弥生時代の日本は水の取り合いで戦争が起きていた。僕は水が人間の命を繋ぐとともに、争いの原因になるということを考えた。

最後に水と人間は生きていくにつれて非常に大きな関わりを持っていることが分かった。我々はいつか無くなるときが来るかもしれない水が大切な存在として使っていくことが生きていくうえで重要にすべきことなのだと考えた。水は生き物や人間の命を繋ぐだけではなく、人間の欲望や心情なども繋ぐことができるのではないか。そして人間はその事が分かっても水の取り合いなどで戦争を続けていたのだろう。血を流すためだけに水を得るならば、そもそも水を必要としなければいけないのか。しかし生きるためには、そういうわけにはいかない。僕らはこれを考えながら水について一つずつ学ぶべきなのだろう。

入選

船坂川が教えてくれたこと 兵庫県

西宮市立山口中学校 二年 前田 直太郎

僕が船坂に引越してきたのは、二歳のときでした。船坂は、四季折々の自然に包まれた静かな山里です。耳をすませば鳥のさえずり風に揺れる木々、そしてどこかで流れる水の音。そんな環境に、僕は少しずつ心をなじませていきました。引越してから二ヶ月ほど経ったある日、母と散歩していた時に一本の川に出会いました。それが「船坂川」です。初めてその川を見たときの僕の心は、ワクワクとドキドキでいっぱいでした。透明な水が岩の間を流れ、小さな魚たちがすいすい泳いでいる。そんな様子の全てがまるで宝物のように感じられました。

それから十年以上、僕はこの川とともに成長してきました。川は、僕にとつて遊び場であり、学びの場であり、心のふるさとでもあります。小学校一年生の夏、初めて蛍を見た夜のことは今でも忘れられません。夜の闇にぼつぼつと浮かび上がる淡い光。手のひらに乗せると、蛍は深呼吸をするように体に光を灯していて、それがとても神秘的でした。一匹一匹は小さな命ですが、その光は僕の心に大きな感動をくれました。船坂川には蛍だけでなく、カニやカエル、魚などたくさん生き物が暮らしています。それぞれがこの小さな川の世界で一生懸命に生きています。そんな姿を見ているうちに、僕も自然の一部であることを実感するようになりました。

しかし、そんな川のある出来事が僕を悲しませました。ある年のゴールデンウィーク、僕は川へ出かけました。ところがそこには、バーベキューの後に放置されたゴミや空き缶、ペットボトルが散乱していたのです。下流には白い泡が浮かび、水もにごっていました。美しかった川の姿はなく、僕はとても悲しくなりました。無言でゴミを拾い、家に帰って母にその思いを伝えると、母は「それは残念だったね」と僕をそっと抱きしめてくれました。でも僕の心はまだ晴れませんでした。

そのまま迎えた夏休み、ある日僕は、家族で川へ遊びに行きました。

たくさん遊んだけど、気持ちはずつきりしません。

次の日、僕はジュースのペットボトルを持って川へ行きました。しかし母と一緒に遊んでいるうちに、そのペットボトルが川に流れていってしまったのです。「あんなにゴミを見て悲しくなったのに、自分が川を汚してしまった」と思ったとたん、悔しさと情けなさで胸がいっぱいになりました。そんな僕を見て、母は静かに川のゴミを拾い始めました。そして、「一緒に拾おう」と言ってくれました。拾い終えたあと、母は僕にこう言いました。「一つゴミを落としてしまったら、気が済むまでゴミを拾い続けなさい。」そのときは、意味が良く分からなかったけれど、今の僕なら分かります。きっとあの言葉には『自分が間違った行動をしてしまったのなら、その分は必ず行動で償いなさい』そんな意味がこめられていたのだと思います。

川は僕たちのすぐそばにあります。そして川は海へとつながり、海は地球へとつながっています。僕たちが川を守ることは、やがて地球を守ることにつながっている。そう思うと、自分の行動一つにも大きな意味があると感じます。たとえ一人では何も変わらないように思えても、一人一人が考え、行動すれば、必ず世界は少しずつ良くなっていく。僕はそれを信じています。これからも僕は、船坂川とともに歩んでいきたい。そしてこの川を次の世代にも誇れる姿で残していきたいと思えます。

入選

飲める水にありがとう

和歌山県

和歌山県立田辺中学校

三年

坂倉

朱音

「その水、飲んじゃだめ。」

フィリピンに到着したばかりの私が、水道の蛇口をひねり、コップに水を入れて飲むとした瞬間のことだった。現地のスタッフに止められた私は、思わず立ち尽くした。喉が渴いたときに水を飲む。そんな日常がここでは「危険」とされる。私はそこで初めて、自分が生きてきた環境の特別さに気づいた。

一ヶ月間のフィリピン留学で、私の価値観は大きく変わった。日本では、水道水をそのまま飲む。料理に使うのも、歯を磨くのも、お風呂に入るのも、何の心配もいらない。けれど、フィリピンは違った。水道水は飲料には適さず、現地の人々でさえ購入した飲み水を使っていた。私の滞在先にもウォーターサーバーがあり、毎日補充される大きなボトルの水が命を支えていた。水に対してこんなにも慎重になる生活は初めてだった。歯磨きのときも、口をすすぐのは飲料水。シャワーを浴びるときも、口を閉じ、誤って飲み込まないように気をつける。日本と同じ感覚でいた友人は体調を崩し、数日間寝込んでしまった。「水が怖い」そんな感情を抱いたのは、生まれて初めてのことであった。

だが、それは決してフィリピンが悪いのではない。世界には、きれいな水を手に入れられない人々が数多く存在する。何時間もかけて水をくみに行く子どもたち。水が原因で病気になる人々。きれいな水がある日本の方が世界的には珍しいのだと知り私は言葉を失った。それからの日々、私は「水」に対する意識が大きく変わった。たとえばバケツにためた水でシャワーを浴びるバケツシャワー。限られた水を大切に使いながら、工夫して暮らす人々の姿に、尊敬の念すら抱いた。彼らの生活には、「水を無駄にしない」という当たり前が息づいていた。

そして帰国した日。私は思わず水道の蛇口をひねり、コップに水を注いで一口飲んだ。冷たくて、透き通っていて、どこか懐かしい味。胸の奥が、じんわりと熱くなった。

フィリピンでの経験は、私に問いかけを投げかけた。「あなたが当たり前だと思っているその水、本当に当たり前のものですか。」今、私は願っている。世界のすべての人が、安全で清潔な水を手に行ける未来を。誰もが安心して水を口に運べる日が、早く来ることを。そしてその未来のために、私たち一人ひとりができることは何かを考え続けていきたい。蛇口から水が出ることを、当然だと思わない。水を飲むことに感謝を忘れない。それが、私がこの旅で得た大きな宝物だ。

そしてもう一つ、私はこの経験から「伝えることの大切さ」も学んだ。自分が見て、感じて、驚いたことを、ただ自分の中だけで終わらせてはいけないうと思った。日本に戻ってから、私は家族や友人にフィリピンの体験を話した。水のことだけでなく、人々の暮らしや、子どもたちの笑顔も伝えた。そうすると、話を聞いた人たちも「知らなかった」「考えたことがなかった」と、驚きや関心を示してくれた。

知ること、行動が変わる。行動が変われば、未来も変わる。私は自分の発信が誰かの意識を変えるきっかけになるかもしれないと信じている。これからも学んだことを言葉にし、行動にしながら、水と共に生きる世界の人々のことを思い続けていきたい。

入選

断水生活の練習から気付けた水の大切さ

和歌山県 和歌山県立向陽中学校 二年 松元 菜那

私が小学四年生のときに、大きな台風が起きました。雷がゴロゴロと音を立て、強風や大雨もあり、家が壊れてしまうのではないかと不安でした。そんな中、母が

「断水が起こるかもしれないからお風呂に水をためておこう」と

と言いました。その後は、断水が起きても当分暮らせるように食べ物やトイレなどの準備をしました。お風呂にためた水には、腐らないようにする薬を入れました。母が準備している間、断水が起きたらどれだけ大変か知らなかった当時の私は、そんなに念入りに準備しなくてもいいのではないかと軽く考えていました。

次の日、断水が起こることなく台風は過ぎ去りました。大きな被害が出なかったことに安堵し、断水のために準備していたものを片付けなければいけないと思いつつ、リビングに向かうと母が

「せっかく準備したのだから、今日は一日断水生活してみようか」と私に言いました。実際に起きていないのだから、わざわざそんな不便な生活をしなくてもいいじゃないかと思いましたが、母にこれから先、断水になっても落ち着いて行動できるようになっておいたほうがいいだろうと説明され、一日限りの断水生活が始まりました。まず最初に、断水生活の中で使う日用製品の説明から始まりました。例えば、お風呂には簡単に入れないからと、体を拭くシートが出てきました。その時点で、湯船につかるどころかお風呂に入れるのか怪しいことに驚きました。お風呂問題も衝撃的でしたが、一番水が使えないとこんなにも不便なのかと思ったのはトイレです。トイレを使うのに水が必要なのは分かりますが、そんなに多くは使わないだろうと考え、トイレくらいは普通に使えるのだろうと思っていました。しかし、一回でトイレでは約6リットルという大量の水を使っていたのです。断水生活をしている中での、6リットルはとても多い使用量でした。だから、

トイレを使わずにシート型のトイレを使いました。いつもと全然違う使い方なので慣れるまでに時間がかかりました。シートでのトイレは、勝手に水で流されないのがトイレをした後の片付けにも時間がかかりました。

母に説明された断水生活で使う日用製品を使って一日過ごしましたが、水が恋しくなるには十分でした。今まで当然のように使っていた皆さんの水は、あつて当然のものではなく、たくさん使える今の生活が幸運なだけであることに気づくことができました。断水の経験をして水の大切さに気付くことができた今となつては、断水を軽く見て舐めていた小学四年生の自分に、水が当たり前のように使えなくなる生活がどれだけ大変でしんどいことなのかを伝えたいと思つています。また、それと同時に断水の恐ろしさを理解することができています。たった一日だけの断水生活でしたが、水の大切さやありがたさを身にしみて知ることができた貴重な体験でした。この体験から、水は私たちの生活に大きく関わっていて、なくてはならない存在だということを学ぶことができました。だからこそ、これから何十年先も今のように水を使えるよう水に優しい生活を送っていこうと思ひました。

私達にできる節水は、無いように見えて日常の中にたくさん隠れています。そこに目を向け、これからの未来を考えることのできる人になりたいです。

入選

私の大好きな故郷・鳥取の水

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校 三年 高橋 彩夏

私は、鳥取に生まれ十四年間ずっと鳥取に住んでいる。私は、鳥取の水道水が好きだ。家の蛇口から出てくるお水が何よりもおいしいと思っている。

そう感じたのは、以前、県外に泊まって水道水を飲んだときだった。「あれ？なんかいつも飲んでる水と味が違う……」そう思った。水に味がある？ 違いがあるのか？ それまでそんなこと考えたこともなかった。すると母が、「鳥取県の水道水は全国で一番おいしいってテレビで言ってたよ。」と、教えてくれた。今まで当たり前のように飲んでいた水道水が、全国で一番おいしいだなんて知りもしなかったので、とても驚いた。と同時にとても嬉しく思った。自分がそのおいしい水を造っているわけではないが、我が故郷にそんな誇らしい物があると思うと、喜ばずにはいられなかった。

鳥取市水道局のホームページで、水道水の水源の多くは、川の水であることを知った。そう言えば、家のすぐ近所にある小さな川では、初夏になるとホタルを見ることが出来る。これもきれいで豊かな水があるお陰だ。

我が家は、近くの農家の稲刈りを手伝い、お米を分けてもらっている。収穫したお米を炊いて作った塩むすびは、最高においしい。その農家は、梨作りもされている。名産の二十世紀梨は、九月初めの収穫のためには、七月から八月に、適切な量の雨が降らないと大きく育たないそうだ。梨の実に包丁を入れたとき、滴り落ちる甘酸っぱい果汁は、水がなければ味わうことができない。私の普段感じるおいしいお米や野菜、果物は、この鳥取の水がなければ成り立たないと言っても過言ではないだろう。

鳥取の誇りである水を守っていくためには、何が出来るだろうか。まずは水を汚さないことが大切だと考える。毎日の食事を残さずきれいに食べ、油や食べ残しを排水溝に流さないこと。シャンプーや洗濯洗剤を

必要以上に使い過ぎないこと。また節水を心がけるのも大切なことだ。家の裏の農家の畑には、役目を終えたステンレスの浴槽が置いてあり、そこに雨水が溜められている。小学生の頃は、「なぜ畑にお風呂？」と疑問に思っていたが、あるとき野菜の苗を植えた農家の方が、バケツでその水を汲んで、苗に与えているのを見た。畑には水道がないので、雨水を溜めて有効活用されているのだと知り、浴槽はそのためのものと初めて納得した。これも限りある水を生かすための、先人の知恵だと思う。

現在、世界の百九十六ヶ国のうち、日本を含め、たった十二ヶ国しか、安全に水道水を飲める国がないそうだ。その十二ヶ国の中の日本で、一番おいしいという水を飲むことができ、その水で作られた農産物を食べられる私は、とても幸せだと思う。この幸せを次の世代にもずっと残していけるよう、水を大切に努力をコツコツと積み重ねていきたい。そして、未来の子ども達にも、「鳥取の水が大好き」と思ってもらいたいと願う。

入選

先人たちから学ぶ

愛媛県

今治市立南中学校

三年

前田

佳汰

高原を自転車で走る。溪谷の水を横に見ながら。心地よさに足を止める。何とも言えない薄く青味がかった緑色だ。橋の上からでも川底の石まできれいに見える。山々が蓄えて長い時をかけて浄化し、出た水だ。湧き水も辺りにある。冷たく澄み切った水だ。美しさに言葉も出ず、夢中でカメラのシャッターを切る。周りの空気まで澄んでいる。

愛媛県には沢山の水をたたえた川がある。水辺には様々な生き物や植物が生息している。コロナ禍以来、久万高原の美しい水にひかれて、何度も訪れている。高原の野菜、果物、米どれも格別な味だ。高原の気候ももちろん、豊かで美しい水があるからに違いない。小学生の頃、仰西渠という水路が江戸時代、久万高原で造られたと学んだ。溪谷の水に誘われるように、実際に見に行ってみた。

今も現役で活用されている仰西渠には、美しい水が勢いよく流れていた。爽やかな空気に、思わず息を飲んだ。

江戸時代、深い谷にある久万川の水を水田に引けず、人々が困っていた。これを何とかしようと山之内彦左衛門が私財を投げうって造った用水路が仰西渠だ。それまで木をくり抜いた懸樋を使っていたが、壊れやすく、台風や大雨で流されてしまう。修理の費用や手間等でどれ程負担が大きかったことだろう。そこで硬い岩盤をくり抜き用水路にしたのだ。凄い発想だ。江戸時代だから全て手掘りだ。幅一・二m、深さ一・五m。長さは五十七mにも及ぶ。三年かけて造りあげたのだ。一体何人の人がこの作業に携わったのだろう。土の地面を掘るのさ大変な重労働だ。ましてや硬い地盤だなんて……。彦左衛門は掘り進んだ分の岩の粉と貴重な米を引き換えに渡すことで作業を促した。どうしてもこの地域の田を水で潤したかったのだ。人々もその思いに応えたのだ。農業をしながら、岩盤を掘るのは並大抵のことではない。豊かな久万川の水が田に満たされたときの喜びは計り知れない。米作りには欠かせない貴重な水源だ。

目の前には、しぶきを上げて輝く水。今も仰西渠が豊かな水を運ぶ水路として活躍しているのを見ると、江戸時代の人がいかに先見の明をもっていたのか、地域の人たちが仰西渠をどれだけ大切に守ってきたのがわかる。美しい水の裏には先人たちの努力がある。

私の住む今治市の玉川ダムにつながる蒼社川は「人取川」と恐れられており、江戸時代治水工事で川の流れを変えて洪水を防いでいる。ここにも昔から水の力を利用するための知恵がある。今も冬の間、川床の樹木や土砂を取り除く工事をしている。ここ数年は渇水と突然の豪雨の被害がすんでのところで防がれている。一昨年は春に雨がほとんど降らず、貯水率の数字を毎日のように気にしなくてはならなかった。庭木や野菜、果物もうまく育たなかった。ダムの水を維持するには上流の水が必要だ。豊かな水を育むには豊かな森林の力が不可欠となる。溪谷の美しい水も蒼社川の水も深い山々があってこそ存在する。

この春休み、今治市で大規模な山火事が起こり、鎮火のために県内外から沢山の方々の力と水の力が必要となった。何とか協力したいと思うものの、個人の力だけでは難しい。改めて水の有り難さを感じた。雨に頼るだけでなく、日頃からの水の蓄えや水資源の使い方を見直すこととして見直しをしなければならぬ。被害にあった山が元通りになり、水を蓄えられるようになるまで、何十年もかかるはずだ。火事で失われた森林を取り戻すためにも豊かな水が鍵となる。水と森林はお互いが支え合い、私たちが共に生かしている。

豊かな水は昔の人たちから受け継いだ宝だ。先人たちの知恵と努力を見習い、豊かな水を守りたい。森林や水を守る活動に参加したい。何十年後であっても、愛媛に水が輝いているように。今、動き出そう。未来に繋ぐために。

入選

みなもと

佐賀県 佐賀大学教育学部附属中学校 二年 田中 絆愛

学校からの帰り道、信号待ちの暑さから逃れて、いつもとは反対側の川沿いの道を歩いてみた。ふと川を覗いてみると、その流れには土や砂が混じっていた。自然の川ゆえ土砂が混ざり、枯れ草が流れアメンボが遊ぶのは当然だろう。私たちは、この複雑な自然物から土砂やごみを取り除き、殺菌して安全な水にした上で日々使っているのだ。

その日の夕方、塾での地理の授業時間。バーチャル地球儀システムを使って各国の世界遺産を調べた。アフリカの世界遺産を調べようと散策したところ、茶色や黄色に染まった川を見つけた。「こんな水飲みたくない」それが私の率直な感想だった。だが世界には、ろ過や殺菌をせず汚れたままの水を飲んでいる人々が多くいる。その人々が住む地域の多くはサハラ以南のアフリカ諸国に集中しており、その数は約六億六千三百万人。人々は安心して飲める水が身近になく、池や整備されていない井戸などから水を汲んでいるそうだ。

汚れた水を飲むので、もちろん健康にも悪影響を及ぼす。ようやく水源にたどり着いても、その水は多くの場合、土砂や細菌、動物の糞尿などが混じった危険な水で、飲用に適さない。浄水処理をしないまま飲むと、特に抵抗力の弱い子どもたちはたちまち感染症を起こしてしまう。汚れた水を主な原因とする感染症で命を落とす子どもたちは、一日約八百人、年間約三十万人にものぼっているそうだ。そのような人々について私は今まで「可哀想だな」「安全な水を飲める環境が整備されたら人々は救われるのにな」など、どこか他人事としてしか考えていなかった。生きるためにやっとの思いで手に入れた水は、自分たちの命と未来を危険にさらす水。だけれども、どんなに汚くてもその水を飲まなければ生きていけない。他に飲む水がないから。汚れた水を飲む人々の心の声が聞こえてくるような気がして胸が締めつけられた。

汚れた水の現状を知り、私は安全な水を世界中の人々が飲めるための

至上課題である水質汚濁の防止への意識がより高まった。現在生活排水や産業排水、ごみのポイ捨てなどを原因とする水質汚濁は「公害」として認定されている。四大公害病の水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病は水質汚濁によるものだ。水質汚濁を防止するには、油汚れをしっかりとふき取る、天然洗剤を使うようにする。ごみのポイ捨てをやめる等の身近なことを一人一人が意識することが第一歩だ。遠い国の人々が安全な水を飲めるようになることを祈りながらできることは身近に沢山ある。

水が人々の生活に与える影響力は凄まじい。水は飲用としてはもちろん、生活面でも多く使われている。水を使用できない状況になった場合、私たちはたちまち生きていけなくなるだろう。しかし、洪水や水系感染症が原因で命を落とした人も大勢いる。このようなことは世界各国で多発しているが、それでも私たちには水が必要なのだ。それだけではない。今の七つの海が生まれるより遥か昔、世界は「パンゲア大陸」という一つの大陸だったが、今から約二億年後、水の移動能力の影響で世界の大陸はまた「アメイジア大陸」という一つの大陸となり、海もまた一つになるという。学校の帰り道に流れているようなただの水が大陸の形を変えることができるのだ。

アフリカにはこんな格言がある。「汚れた水を洗うことはできない」アフリカの人々は水の必要性をより理解し、また一方で汚れた水が原因で命を落とす人々が大勢いるからこそ、その危険性も十分理解しているのだろう。水の必要性と危険性を知り、そのことについて考えることが私たちの一つの役目だと思う。

部活の帰り道、あの日と同じように川沿いの道を歩いた。水面に映る自分自身の顔を見て私は決心した。水のことをもっと知ろう、知ってもらおう、と。

入選

五十年後の僕へ

大分県

大分大学教育学部附属中学校 三年

西嶋 奏人

僕が浸かっている別府の温泉。そのお湯が「五十年前に降った雨」と聞いた時、僕は驚きとともに、水の壮大な旅路を想像した。

五十年前に降った雨が地面に染み込み、長い時間をかけて旅をするように地中を進む。狭い隙間を通り、岩にぶつかりながら温泉成分と混ざり、マグマの熱で温められてようやく地上に湧き出てくる。そんな水に今、僕は浸かっている。水って本当にすごい存在だ。

別府には無料で入れる温泉があったり、地熱を使った「地獄蒸し」で野菜や卵を蒸して家族でわいわい食べた楽しい思い出もある。

「湯ぶっかけまつり」では二百一十トンのお湯をかけ合い、街全体が笑顔で包まれる。

そんな風に、温泉が身近にあるからこそ生まれる楽しさやぬくもりが、大分で暮らす僕たちの生活の中にはたくさんある。

身近で当たり前だと思っていた温泉は、実はただのお湯ではない。それは、時を超えて届いた自然からの贈り物であり、「温泉はずっとあるものではない。だから大事にしてほしい」という、昔の人たちからのメッセージのように思えた。

温泉は永遠に湧き続けるのだろうか。

僕が六十四歳になったとき、「これは五十年前の雨なんだな」と、昔を懐かしみながら温泉に入ることができたらどうか。

たくさん湧き出るからと無駄遣いをすれば、いつかはなくなるかもしれない。地球温暖化が進めば、温泉にも影響が出るだろう。

そう考えると、未来の温泉がどうなるかは、今の僕たちの行動にかかっていると思う。

だから僕は、未来の自分に向けて、決意を込めた手紙を書いてみることにした。

五十年後の僕へ。

あなたは今、別府の温泉に浸かっていますか。

家族と一緒に、温泉でゆっくりした時間を過ごしているのかもしれない。

せん。もしそうなら、僕はとてもうれしいです。

なぜならあなたが温泉を楽しんでいるのは、今の僕たちが自然を大切にし、水や環境を守る努力をしてきた結果だと思っからです。

温泉は永遠に湧き続けるものではありません。守らなければいつか枯れてしまうかもしれません。だから僕は決めました。

水を大切に使う、ごみを捨てない、自然を汚さない行動をすること。温泉について学び、大切に思う気持ちを持ち続け、小さな努力を積み重ねていくこと。その積み重ねが、きっと未来につながる大きな力になると信じています。

そして、これまで温泉を守り続けてくれた人たちに感謝し、その思いを引き継いで、僕も未来へバトンをつなぎます。

僕にとつて温泉とは、体を温めるだけではなく、心までほっとさせてくれる場所です。

家族と温泉に浸かっているんびり過ごす時間は、かけがえのない特別なひとときです。

別府には温泉を楽しみに世界中から観光客が訪れ、それが地元の人たちの暮らしや仕事を支え、文化や歴史とも深くつながっています。

もし温泉がなくなってしまうたら、多くの笑顔や、受け継がれてきた文化まで失われてしまうかもしれません。

簡単なことではありませんが、僕が周りにも声をかけ、みんなで行動をすれば未来は変えられると信じています。

五十年後の僕が、昔と変わらない温泉のぬくもりを感じられるように。

「かつてここに温泉があったんだ」と、思い出話をする未来にならないように。

僕は温泉を守る一歩を踏み出します。

この決意が未来に繋がって、五十年後の僕が温泉に浸かりながら、今の僕を思い出してくれる日がやってきましたように。

入選

「水は財産」という考え方

宮崎県

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

三年

堀川

和瑚

「ただいまー。このダンボール、キッチンまで運んでくれない？ 重たいから気をつけて運ぶんだよ。」

ダンボールをのぞくと、瑞々しい曲がったきゅうりが、箱いっぱい詰められていた。

私の母は農家だ。たまにこうして、売りに出すことのできない野菜をたくさん持って帰ってきてくれる。野菜を身近に感じて食べられるのは、いつも仕事を頑張ってくれている母のおかげだ。季節が夏になるときゅうりやトマト、冬になると白菜など、四季折々の野菜を持つて帰ってきてくれるが、私は母の育てる野菜のなかでも、きゅうりが好きだ。

きゅうりの生産量全国一位の宮崎県では、綺麗で豊富な水資源と温暖な気候を生かした農業が行われている。

母は、よく私に「宮崎県は、野菜を育てることに適した環境だけれども、難しい地域でもあるんだよ。」と話をしてくれる。理由を聞くと、台風だという。

宮崎県は、「台風銀座」という別名をもつほど、一年にたくさん台風が接近する。母の農場もその被害を受けたことがあるそうだ。ビニールハウスは破れ、トマトは水に流され、きゅうりの茎は水につきり、作物の栽培を初めからやり直さないといけなくなったそうだ。

しかし、母にもう一度頑張ろうという気持ちを起こさせてくれたのも台風だったという。台風は貴重な水をもたらしてくれるからだ。晴れの日が続くと母は、天気予報を調べ、雨の降る日を確認する。そのぐらい「水」は、農業においてかけがえのない存在なのだ。

どの野菜においても「水」は、育てる上で大切なものであるが、特にきゅうりは、たくさん水が使われ、適切な水管理が必要だということのみなさんは知っているだろうか。

きゅうりは、九十五%が水でできている。きゅうり一本の重さが百グ

ラムとすると、九十五グラムが水なのだ。たくさん水が使われることで、あの食感と瑞々しさを感じることができるのだ。

また、土壌の状態にも十分注意を払わなければならない。野菜づくりに適した土の条件は、保水性があること。通気・排気性が良いこと。肥料をよく保持すること。酸性度が適切であること。病原菌が少ないこと。の五つだ。また、開花前と後では適したpH値が異なり、開花前ではpH値が、一・八から二・〇の範囲、開花段階に入ると、二・〇から二・二の範囲が理想的とされている。pH値は、土壌の水分状態をあらわす。土壌の様子を確認し、適切な量の水を与えることが、枯れたり腐ったりすることを防ぐために大切だ。

このように、私たちが普段口にしてる食べ物には大量の水が使用されている。また、きゅうりには負けるが、私たちの体は、体重の六十%から六十五%が水でできている。水が血液として、私たちの体に必要な養分や酸素を届けてくれている。私たちは、体を動かすために水を飲む以外にも、お風呂や料理など、たくさん水を使用して生活している。川で泳ぎ、雨の降る音を聞きながら読書をするなど、自然を直に感じながら毎日を過ごしている。

「水も過ぎれば毒になる」この言葉は、水を使用し生活する私たちが知っておくべき言葉だ。水は適切な量を与え、適切な管理をしなければ作物を枯らす。水により起きた被害で何の学びも得なければ、また同じことが繰り返される。しかし、考え方を変えれば、「水は、正しい使い方すれば大切な財産になる」と考えられる。みんなが育て、守ってくれた財産を、次の世代に繋げられるよう、ものや人、生物、そして自然を大切にしていきたい。

入選

一服の水

鹿児島県 学校法人志學館学園志學館中等部 二年 宮脇 愛

釜からひしゃく半分ほどのお湯をくみ、茶わんにそっと注ぐ。そして、茶せんで細やかなリズムを刻んで、優しくのの字をかいて、お客様に一服差し上げる。

お茶の粉も大事ですが、このわずかな水の温度や量はとても大事です。多すぎると薄くて飲めない。少なすぎると苦くて飲めない。ひしゃくから注がれる水のぼこぼこぼこという音は、静まりかえった茶室の中に、大きく響きます。その音はとても優しく聞こえ、居る者をいやしてくれるから不思議です。

私たちにとって欠かせない水。そのことを実感したのは、台風十号の影響で、断水になったときです。朝起きると、停電になっていた上に、じゃ口をひねっても一滴の水も出てこないのです。

「断水になっているから水が出ないよ。水くみに行くよ。」

そう言われて、家にあった空のペットボトルや水筒を持って、給水所へ水くみに行きました。しかし、一度にくめる水量には限度があり、大きなタンクも持っていなかったため、家族で何度も水くみに行きました。念のため前日から浴そうに貯めていた水のおかげで、トイレはなんとかりましたが、暑い時期に電気も水もない生活は、本当に苦しく、水を使う家事は最小限、飲み水も大切に飲むという状況は、本当に不自由でした。じゃ口をひねるとききれいな水がいつでも手に入る、私にとつての当たり前の生活が、どれほどありがたいものであるかを痛感し、いかに無関心に生活していたかを思い知らされました。

能登半島沖地震で被災した知人が、避難所生活を余ぎなくされ苦勞していたのですが、ほんのわずかな期間の断水ですらこんなに不自由な思いをするのだから、被災された方々の避難所での生活は、どれほど苦しく、大変な思いをされていたのかと思うと、「かわいそう」とか「大変だね」といった言葉では表現しきれない思いが込みあげてきました。

「海外の水道水は飲めないよ」とか、「海外で洗たくをしたら、白い服がだんだんくすんだ色になってしまったが、日本に帰って洗たくしたら、元の白色に戻った」などという話をよく耳にします。「本当かな」と半信半疑でしたが、日本のようにいつでもどこでもおいしい水道水を飲める国は世界に多くはなく、百九十六カ国中たった九カ国でしか水道水を飲めないのだそうです。そう考えると、日本がいかに恵まれた国であるか、今の生活がありがたいものであるかということを感じ、「命の水」という言葉の重みを感じます。

しかし、森林伐採や二酸化炭素排出量増加によって引き起こされる地球温暖化の影響、土壌汚染や大気汚染などによって、その日本の「命の水」が汚染されてしまったり、安心して飲めなくなってしまうたりした地域もあります。一度汚染されてしまうと、もとの素晴らしい水に戻すには、相当の時間と労力が必要であり、破壊してしまった豊かな自然は簡単には元には戻らないのです。

氷山の融解、海水温の上昇、海面の上昇、集中豪雨、土砂災害や豪雨災害。私たちの生活をおびやかす問題はたくさんあり、そのすべては水の問題と言っても過言ではありません。今、世界では環境問題を真剣に考え、環境を守るための取り組みが熱心に行われています。私たち一人一人ができることに取り組んでいくことでしか、明るい未来は存在せず、私たちの小さな一歩が、未来の笑顔を守る大きな一歩につながっていくのです。

今注いでいるひしゃくのこの水。お客様をもてなす一服のお茶に欠かせない水。静けさに響く優しい水音。このおもてなしの一服が、いつまでも続いていきますように。このおもてなしの一服を続けていきますように。そう願いながら、今日も明日も明後日も、私は心を込めて、一服のお茶を点ていきます。

入選

水と美しい自然

オランダ アムステルダム 日本人学校 中学部 二年 榎内 友彩

私が「水」に関する思い出で一番印象に残っているのは、キャンプに行った時に、山の上で見た滝や川だ。小学五年生だった頃、友達の家と自然あふれる山奥へキャンプに行った。そのキャンプ場の周りにはたくさんの川が流れていた。

焼き付けるような暑さの中、テントを建てたり椅子を出したり、準備をした。準備が終わると、みんな汗だくになり、川に入ることにした。川に入ると、かき氷を食べたときのように頭が「キーン。」となるほど冷たく、体の力が抜けたような気がした。川にはたくさんの生き物がいた。イワナ、アユ、ニジマス、川の横の岩に囲まれている水溜りで泳いでいるメダカ、オタマジャクシ、岩の上にはカエルもいた。私は時間を忘れるほど遊んでいた。

夜はみんなでバーベキューをした。お肉や野菜、焼きそばを食べ、喉が渴いたら水やジュースを飲むの繰り返しだった。遊び疲れたその日の夜は、気絶したかのようにぐっすりねた。

翌日、朝早く起きて滝を見ることにした。

滝はキャンプ場のすぐ近くにある山の川沿いをずっと登ったところにある。この日も蒸し暑くテントの中でサウナの中にいるようだった。朝ご飯を食べ、出かける準備をした。とても暑かったため、水は必須。こまめに水分補給をしながら山へ向かった。しかし、山へ着き川沿いを歩き始めた瞬間、体が軽くなったような気がした。それはさつき感じた蒸し暑さとは真逆でとても涼しかったからだ。自然の音を聞いたり、植物や虫を見たり、自然を感じながら滝を見に上へ登った。

滝のところについた。目の前には滝は何かも忘れさせるほど美しく、いつまでも耳に残るような音を鳴らしていた。このキャンプでは、滝や自然に癒され水に支えられた。

その思い出を経て、水と人、水と自然について考えた。人は、喉が乾

いたら水を飲み、食べ物と一緒に水を飲む。このように水は体にとって毎日欠かせないものであり、人は、水を飲まないと四、五日程度で死んでしまう。また、人は服や食器を洗うとき、涼むときなど他にも日常でたくさん水を使っている。水は、人の生活にとって欠かせないものである。

水は人の生活だけではなく、美しい自然を保つためにも欠かせないものである。動物、魚、植物、どれも水は欠かせないものであり、海や川、滝などの自然を美しく保つためにも、きれいな水が必要である。

今海では、海洋ごみが増え続けている。海洋ごみの多くはプラスチックで、人間が出した大量のごみが捨てられ、綺麗な海を汚している。また、海にいる魚や亀なども被害を受けている。私はこの環境問題を耳にし、普段の生活の中で私たちに何かできることを考えた。コンビニやスーパーでできるだけ買い物を減らす、エコバックを持参したり、プラスチックではなく木を使用するなど、海洋ごみを減らすため私たちが普段の生活でできることはたくさんある。一人一人が日々の生活の中で少しでも意識することで、海の環境問題が改善され、また綺麗な海を少しずつ取り戻すことができると思う。

綺麗な水を使い、見ることができるようになるために、まずは自分からポイ捨てをしない、プラスチックをあまり使わない、水を無駄遣いしない、など日々の生活で意識することを心に決めた。

入選

命を紡ぎ、繋ぎ、輝かせている オランダ アムステルダム日本人学校中学部 二年 小松 結奈

ーあの日交わした祖母との会話は今でも忘れられない。あなたにとって、『水』とはどんな存在だろうか。

まだ私が四歳と幼かった頃、共働きで忙しかった両親に代わって、祖母はよく私の面倒を見てくれた。どこへ行くにも私は祖母と一緒に。本当に大好きだった。しかし、祖父はある日突然帰らぬ人となってしまった。それからというもの「ゆなちゃんがごはんとおみずあげる!」と言っては炊き立てのご飯と水をお仏壇に並べ、「めしあがれ。」と挨拶をしていた。

月日は経ち、小学校一年生。夏休みが始まり、私と祖母はスーパーで祖父にぴったりのお花を選びお墓を訪ねた。お墓に着いてから一番にすることー。

「おばあちゃん、どうしていつもおじいちゃんのおはかにおみずをかけるの?」

ちよつと重い水桶を、ぽちゃん、ぽちゃんと引きずりそうに運びながら私は聞いた。

「ゆなちゃん、今日はとってもあついなね。」

そして、にこりとわらってこう続けた。

「おじいちゃんもね、ゆなちゃんといっしょ。あついとのがかわくでしよ。きつと、おじいちゃんもどがかわいているんじゃないかな。」

そうだよ。私は袖をまくり柄杓を持って「おじいちゃん、どーぞー!」と言って水をかけた。祖母と並び、一緒に生けたお花もまるで喜んでいくのかのようにわらって見えた。紋白蝶もひらひらと舞っている。「またくるね。おじいちゃんバイバイ。」蒸し暑かったはずの私の身体はいつの間にか、清らかな空気と共に包まれ、優しい気持ちで満ち溢れていた。

そんな懐かしい温かなエピソードが私の脳裏を駆けめぐり、今この作文を書いている。

お墓へと会いに行く時も、お仏壇の前で挨拶をする時も、祖父と私を繋いでくれていたのは、『水』という存在だった。

今は亡き人、動植物、人間、心と身体をも潤す。これこそが水の生命力なのではないだろうか。水が命を紡いでいる。水が命を繋いでいる。水が命を輝かせている。そんな水を大切にしていこうと、そう心に誓った。

では、そのために私には何ができるだろうか。

一人考えていると、母は何か懐かしい光景を思い出したようで、私に教えてくれた。

母の実家は昔、お風呂のお湯を使って洗濯の予洗いをしていた。祖父は朝になると意気のあつた連携プレーが始まる。祖父が浴槽からお湯をすくい、祖母は洗濯機へ。つまりは、浴槽から洗濯機へのバケツリレード。

今まで祖母の姿を見てきた母はそれを受け継ぐように、私が生まれてからはホースを通して浴槽から洗濯機へとお湯を汲み上げる風呂水ポンプを使っている。母も同様に水の節水をしていたのだ。代々受け継がれているその風習に私は気づかされた。開発者の知恵と能力、そして時代と共に様々な技術の進歩を遂げる今、節水機能付きの洗濯機も開発され世に出回っている。これは、節水・節約への意識の高まりの証なのではないか。

今、私には何ができるのか。それを常に頭の中に入れ行動すること、これが今後の私の課題。

最後に。命を紡ぎ、繋ぎ、輝かせてくれていた『水』へ。また『水』に携わっている全ての方々へ。ーありがとうー。

入選

オランダから学ぶ水泳 オランダ アムステルダム日本人学校 中学部 二年 清水 朱莉

もし、水の事故に遭ってしまったら、私は適切な行動をとることができるだろうか。

ふと、そう考えたことがある。別にこのとき、悲惨な水の事故を見聞きしたわけではない。オランダの水泳教室について聞いたのだ。

オランダには、「ディプロマ」というものがある。これは、オランダの水泳教室に通うことでとることができる国家資格だ。日本の水泳教室では、いろいろな泳ぎ方を覚えて、速く、綺麗に泳ぐことを目標としていることが多い。一方で、オランダの水泳教室はそうではない。オランダでは、生きるための水泳を教えている。浮くことや泳ぐことの練習もするが、綺麗に泳ぐことを目標にはしない。他にも、着衣水泳や、深いプールに潜る練習をするそうだ。

では、なぜオランダでは「生きるため」の水泳なのだろうか。オランダは運河が多いことで有名だ。ただし、街の景観を守るために運河の周りには柵がないことが多い。そのため、バランスを崩すと落ちてしまいうさだと感じる道が多くある。日本なら、柵をつけよう、となるところだが、それでも水の事故は発生している。それなら運河に落ちて泳げるようになればいい、というのがオランダの考え方だ。だから、オランダの水泳の目的は、運河に落ちても生き延びることができるようにすることなのだ。

驚いたのは、ゴーグルをつけていると回収されると聞いたときだ。日本人学校でも水泳教室があったが、泳げる人のコースではゴーグルを回収されたそうだ。よく考えてみれば、運河に落ちたときにたまたまゴーグルをつけていた、なんてことは殆ど起こらないのである。

調べてみると、オランダの溺死率は日本の約十分の一。海抜が低く、運河が多いのにも関わらずこの結果である。これは、オランダの「生きるため」の水泳教育の賜物だと私は考える。子供の頃から教育を受けて

いるため、万が一水の事故にあったとしても、焦らず適切な行動をとることができるのだ。

水は、人々の生活を大きく支えている一方で、扱い方を間違えたら人の命を奪うことにもなる。「生きるため」の水泳をオランダレベルで学ぶことは、日本ではなかなか難しいと思う。しかし、適切な行動を知っておくことで、水の事故にあつた時の生存確率はぐっと高まるのだ。この先、水の事故に遭うかどうかは分からないし、もちろん遭わない方が良い。だが、水の事故に遭ったときの対応を知っておいて損はない。それが、自分の、あるいは誰かの命を助けることになるかもしれないのだ。最初の問いかけに、私はイエスと答えられるように、自分にとって最適な行動をしっかりと覚えて行動できるようにしたい。

入選

水と戦い、水と生きる オランダ アムステルダム日本人学校 中学部 三年 橋本 葉南

「水の都」と言われたら、どこを想像するだろうか。ゴンドラやリアルト橋が美しいヴェネツィアだろうか。それとも道頓堀川にかかる橋からグリコポーズを決める大阪？わたしは「水の都」と言われると、いつもこの言葉を思い出す。

「世界は神がつくったが、オランダはオランダ人がつくった。」

今、私が暮らしているオランダは、国土の五分の一が水、四分の一が海面下となっている世界有数の「水の国」だ。私の家があるアムステルフェーンは、海抜マイナスメートルの土地にある。本来、海の底に沈んでいるはずの私の家があったって普通に陸上にあるのはなぜなのだろう。その答えが見つかったのは、私が友達とともにオランダのある博物館に行ったときである。その博物館ではオランダおよびアムステルダムの発展の歴史がテーマになっていた。先述したあの言葉に出会ったのも、そのときだった。

遠い昔、今のオランダの大部分は、水に沈んだ存在しない土地だったそう。今のオランダは、国の人々が風車を使って排水を行ってつくった土地でできているらしい。オランダの人々は、自分達の力で水と戦い、土地を切り拓いて己の国を作り上げてきたのだ。

ところがこの作文を書くにあたり、さらに調べてみると、土地ができた後も、オランダ人と水との戦いは終わらなかったことがわかった。例えば一四二一年の「エリザベートの洪水」は、七十二の集落が破壊され、一万人もの死者を出した。一九五三年には高潮により堤防が決壊し、一八〇〇人を超える市民が犠牲となった。

そして一九七八年、ついに「デルタ」が完成した。これはオランダの世界最高レベルの治水技術を用いてつくられた巨大な堤防である。これによってオランダは現在のような水との良好な関係を築けているのだ。

自らの技術で国をつくり、水から守り、そして今では水と共生してい

るオランダ。オランダ人が言う「世界は神がつくったが、オランダはオランダ人がつくった。」の根本には、水との関わり方を一生懸命模索してきたという自負があるのだ。

今のオランダ、そして私は、「デルタ」に、いや、水と戦い続けたオランダ人の壮絶な歴史に守られている。オランダに、海抜ゼロメートル以下に住む私は、このことを忘れず、水とどうにか共生しようとしたオランダ人にならって生きていきたい。

入選

水を巡る旅へ

ブラジル サンパウロ 日本人学校 中学部 一年 石垣 志織

陽が出ていなくても、汗が噴き出す時がある。去年の夏はこんなに暑くなかったのに。ブラジル駐在が二回目の両親は、夏のサンパウロは扇風機だけで十分、と言っていたのに。冷凍オレンジの冷たさが、ほてった体に染み渡る。東京やサンパウロだけではない。今世界中で、何かが動き出している。

パリッという、乾いた足音が次々に響く。ガイドの方は、寂しく一つ残された、小舟の前で立ち止まった。

「ここは昔、雨季になると土地が水にどっぷり浸かっていたから、小舟で移動したんだけど、今は平原のままなんだよ。」

それは去年の十月、修学旅行でパンタナールに行った時のことだった。パンタナールはブラジルの中央西部、地理的にへそにあたり、ボリビア、パラグアイ、ブラジルの三国にまたがる世界最大の大湿地帯だ。また、ユネスコ世界遺産に登録されていて、多くの生命を支える、「動植物の宝庫」でもある。当時は雨季を迎えると、水に満ち溢れる美しい場所だったようだ。ここ数年、雨季の降水量が急激に減り、この周辺のように、雨が滅多に降らなくなってしまったエリアもあるということだった。雨が降らないことや、気温の急上昇は、乾燥化を促すのだ。私たちが直面している猛暑は、乾燥化の原因となり、大地や空気の潤いを奪う。実際、人々や動植物の健康状態に害を及ぼしている。ニュースで見る、動物たちが干からびて死んでしまった写真、目を背けたくなるような悲惨な山火事の映像……。その度に思う。ああ、消えていく。

氷の塊が湖めがけて、真っ逆さまに落ちていく。その後、見事な水しぶきと轟音が響き渡った。エル・カラファテのペリト・モレノ氷河だ。青白く輝く氷の塊は姿を変え、水となり、天に消え、また雪となって姿を現す。この、当たり前としか言いようのない水の摂理が、美しい大自然を生み出すのだ。巨大なスケールを持つ、この氷河も溶かされてしまうのか、

と信じられない気持ちになったことを、はつきりと覚えている。

今、気候変動によって、日本の四季の変化がなくなってきたように、ブラジルを含む中南米も猛烈に暑く、「水」が地球から失われつつある。リオ・デ・ジャネイロでは、先週気温が四十五度に達した。世界最大の熱帯林を持ち、「地球の肺」と呼ばれるアマゾンでは、渇水が起きて、アマゾンイカが大量死しているそうだ。日本の反対側に位置し、国土面積は二十三倍もあるとはいえ、どこか、水のサイクルが狂ってしまったているのを肌で感じる。近年、世界中の人が日に日に変わる気候に狼狽えるように、水も、自分の居場所を探し求め、地球が進む未来を案じている。

先日、JAXAの星出宇宙飛行士のオンライン講演を聞いた。地球は宇宙から見ると常に表情を変え、青く美しいから見ていて飽きない、という言葉が胸に刺さった。

縁あってやってきた南米。雨季には、土地の八十パーセントが水に沈み、地球上でも最も水量が多い平原、パンタナール。地球温暖化に負けず、前進も後退もしていないペリト・モレノ氷河。日本の国土面積の十八倍を超え、渇水が深刻化しているアマゾン川。姿形は違えど、とてつもないスケールで生きている水たちを、私たちはいつの未来まで守れるだろうか。この広い世界で生きる、水たちと共存する命を未来に繋ぎ、この青い青い地球を守りたい。

まずは、今日も扇風機をつけずに、冷たい搾りたての生オレレンジジュースで喉を潤し、暑さから解放されよう。「一人の千歩より、千人の一步」なのだから。

入選

チエテ川を通じて見る日本 ブラジル

サンパウロ日本人学校 中学部 二年 神戸 風花

あなたはチエテ川を知っているだろうか。私が今住んでいるブラジルのサンパウロ市内を流れる川のことだ。チエテ川をインターネットで検索してみると、綺麗な川とは形容し難い写真ばかりが出てくるだろう。そんな川を身近に日々過ごしている私は、チエテ川を通して日本の水の素晴らしさを実感することが多くある。

小学六年生の修学旅行先の事前学習で、チエテ川の源流について調べることがなった。調査を進めていくにつれて、深刻な汚染問題が起こっていることが判明した。チエテ川の写真はゴミが浮いているものや川全体が泡で覆われているものばかり。また、さらに調べていくと私にとって衝撃的な事実が直面する。なんと、毎日学校に来る道のりで見かける汚い川はチエテ川だったのだ。どこか他人事のように感じていたチエテ川の汚染問題を身近に感じた瞬間だった。

待ちに待った修学旅行の日。山道をしばらく歩き続け、源流に辿り着いた。岩の狭間から流れ出る水は、想像よりもずっと綺麗だった。この透き通った水がああチエテ川の始まりだなんて誰が思うだろうか。手で掬って飲んでみると、ひんやりと冷たく、疲れた体に染み渡るようだった。それならば、普段目にするチエテ川はどうしてあそこまで汚くなってしまうのか。その原因は、都市部から出てくる生活用水や工業用水が川に流れ出ていることだ。私が暮らすサンパウロは世界都市であり、人口が多い上に働く場所も多い。だからこそ、下水道管の整備が疎かだと川に悪影響を及ぼしてしまふ。近年、急速に発展を遂げているブラジルが抱える課題と云えるだろう。

チエテ川を語る上でもう一つ欠かせないのが洪水問題だ。チエテ川が流れるサンパウロも日本と同じく大雨で洪水が引き起こされることが多々あった。しかし、それは二十年程昔の話である。今でも洪水の被害は無くなっていないが、その被害や数は激減したと言えよう。被害が少な

くなった背景には国際協力機構、JICAの存在がある。

私は今年、職場体験学習で、JICAサンパウロ事務所にお世話になった。そこでもチエテ川に関する印象的な出来事がある。それは体験学習の移動中に、偶然チエテ川を通り過ぎた時のこと。「あ、チエテ川」と思わず呟いた私に、職員の方がチエテ川で起きていた洪水問題について教えてくれた。それまで洪水が起きていたことも、日本の事業であるJICAが問題解決のために尽力していたことも知らなかった。そんな中、話を聞き終えて一番に感じたのは、日本が誇る技術力が、今ここに住む人々の笑顔を支えているという事実に対する誇らしい気持ちだった。

今、私はブラジルという日本の反対側に住みながら、チエテ川を介して日本の水の素晴らしさを日々実感している。日本には、安全な水道水も洪水を防ぐ技術もある。しかし、それを簡単に「当たり前」と思っていない。日本人が自国の水を信用できるのは、これまで日本に尽くしてきた人々の努力のおかげだ。その「当たり前」は日本人として誇っていくものでもあり、また、いつまでも続いていくように守っていかなければならないものである。私の住むブラジルでも、昔より安心して水を使えるようになった。これから先の未来、いつか世界中に日本のような「当たり前」が広まって欲しい。そのために私たち日本人は「当たり前」の先駆者として、世界と手を取り合っていくべきだと思う。



「健全な水循環」
ロゴマーク

水の作文コンクール

作品募集

国土交通省が実施する中央審査会において、最優秀賞・優秀賞を受賞された方は、8月上旬の表彰式での賞状の授与、ダム・河川管理事務所等での1日事務所長体験、シャワーズがデザインされた名刺をプレゼント! ※最優秀賞(1編)、優秀賞(10編程度)

考えよう。そして伝えよう。

大切な「みず」のこと。

「水」をテーマにした作文を募集します。

「水」とは、みなさんにとって、
どんな存在ですか？

暮らしの中での体験や、
授業などで学んだこと、調べたこと・・・

みなさんにとって、
大切な「水」への思いを
つづってみませんか？



奥津湖(岡山県赤松郡瀬戸町)



板川(長野県北安曇郡田代町)

ポケットモンスター

No.134 シャワーズ

タイプ ぬす とくせい ちよすい

シャワーズはきれいな水辺に生息し、細胞が水の分子に似ていることから、「水の日」応援大使として8月1日「水の日」を応援しています。

◆メインテーマ

水について考える
(個別の題名は自由)

◆応募対象

中学生(2025年4月時点)
海外からの応募もお待ちしております。
※作品は日本語でお書きください。

◆応募締切

【国内】各都道府県の水資源担当当局にお問い合わせください
【海外】令和7年5月16日(金)

◆提出先(問い合わせ先)

国土交通省水管理・国土保全局
水資源部水資源政策課
〒100-8918 東京都千代田区霞が関2丁目1番地3号
TEL:03-5253-8386(直通)

【主催】水循環政策本部、国土交通省、都道府県

【後援】文部科学省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

水の作文 検索

※詳しくは、二次元バーコードから「水の作文コンクール」ページをご覧ください。



8月1日は「水の日」 | 水循環基本法で、8月1日は「水の日」と定めています。8月1日から7日は「水の週間」です。

第47回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（令和7年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と
同じ年齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する
者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・令和7年5月30日までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて
到着分有効
 - ⑥ 版權等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない
- 2 審査
応募作品7,482編のうち、各都道府県の地方審査を経た193編について国土交通省水資源部による
内部審査を行い、中央審査会の対象となる40編を選出。
令和7年6月27日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞9編及び入選30編
あわせて40編の入賞作文を決定。

3 表彰 (1) 賞および賞品

賞		賞品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	農林水産大臣賞	賞状、副賞
	経済産業大臣賞	
	国土交通大臣賞	
	環境大臣賞	
	全日本中学校長会会長賞	
	水の週間実行委員会会長賞	
	独立行政法人水資源機構理事長賞	
シヤワーズ賞		
	中央審査会特別賞	
入選		賞状、副賞

(2) 表彰式 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を令和7年8月1日（金）に日経ホールにて開催された
「水を考えるつどい」において表彰

4 中央審査委員（敬称略）

- 瀧川 拓哉 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：農林水産省農村振興局整備部水資源課長
- 市川 紀幸 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：経済産業省経済産業政策局地域産業基盤整備課課長
- 片貝 敏雄 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：国土交通省大臣官房参事官（水管理・国土保全局担当）
- 吉川 圭子 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：環境省水・大気環境局環境管理課長
- 岩崎 紀美子 全日本中学校長会編集部長
- 須磨 佳津江 キャスター
- 長崎 宏子 スポーツコンサルタント 元オリンピックスイマー
- 渋谷 正夫 公益社団法人 日本水道協会調査部長
- 藤井 政人 独立行政法人水資源機構理事
- 橋本 淳司 水ジャーナリスト 武蔵野大学客員教授

- 5 主催者等 主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
後援：文部科学省、農林水産省、経済産業省、環境省、
全日本中学校長会、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構

第47回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

番号	都道府県名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
1	北海道	九島 希奈	羽川 莉子	楠原 瑛太	後藤 せり	
2	青森県	佐々木 吉秀	青木 童子	若松 紗那	本間 幹啓	池田 康汰郎
3	岩手県	佐藤 由実	芥川 雄哉	佐々木 果歩	高橋 楓英	岩館 和花
4	宮城県	齋藤 すみれ	坂本 悠維	針生 楓永	千葉 梨璃衣	坂内 聡介
5	秋田県	児玉 未維	佐々木 愛彩	小笠原 弘礎	石塚 愛菜	佐々木 凜
6	山形県					
7	福島県	稲垣 碧	小松 志	須藤 旭	舟木 いろは	諸根 さつき
8	茨城県	中島 千智	大越 玲舞	戸崎 陽菜	山本 華穂	安村 夏奈羽
9	栃木県	児玉 結彩	遠藤 絢那	横尾 美月	金 悠俊	築瀬 琳
10	群馬県	薦岡 怜奈	倉上 由宇	柿崎 曆	渡邊 隼一郎	亀井 ひまり
11	埼玉県	石田 輪	岩崎 美空	杉本 萌々音	おつじ 荘龍	塚原 晃太郎
12	千葉県	守屋 佳乃	岩波 小乃葉	宮沢 莉久	森 大地	江口 明祐希
13	東京都	竹内 杏	稲垣 奈名子	信田 涼葉	伊藤 由希	長嶺 百花
14	神奈川県	藤井 彩音	風間 修羽	鈴木 康太	加藤 権	遠藤 凜
15	新潟県					
16	富山県	奥 望帆子	山尾 悠輔	澁 ももこ		
17	石川県	吉田 喜一	片山 結菜			
18	福井県	田中 琴菜	三木家 杏珠	平井 理湖	天谷 麟	佐々木 彩乃
19	山梨県					
20	長野県	小山 怜南	徳武 和季	徳武 汰一		
21	岐阜県	木下 愛琉	神農 はな	村山 心菜	井戸 幸志郎	井戸 伴香
22	静岡県	西ヶ谷 あかり	長谷川 結理	田中 宏遠	森田 花帆	伊藤 廉
23	愛知県	佐藤 心春	森下 玲奈			
24	三重県	浅沼 香菜子	鈴木 葵唯	土井 柚香	水谷 真菜香	渡辺 心晴
25	滋賀県	谷澤 あかり	林 咲和	福岡 京		
26	京都府	引原 菜花	楠本 健琉	山本 栗央	廣田 夏音	
27	大阪府	西海 奏	大湊 舞奈	八木 美薫	村上 市香	湯田 礼
28	兵庫県	上田 悠智	森田 瑞希	前田 直太朗	細山 陽由	今里 詩織
29	奈良県	鈴木 陽親	東久保 康生	三島 陽葵	山田 柚季	大賀 美季
30	和歌山県	坂倉 朱音	松元 菜那	岩崎 志果		
31	鳥取県	高橋 彩夏				
32	島根県	藤井 桜子				
33	岡山県	藤田 莉緒	吉玉 千夏	羽井佐 葵威	山本 遊大	森本 瑛仁
34	広島県	杉岡 愛笑	中津 舞花	村上 ゆき		
35	山口県	長廣 舞雪	小林 瑚子	佐藤 優姫		
36	徳島県	柳本 紗那	井内 姫和	山田 愛音	井原 健伸	飯島 陸斗
37	香川県	三木 かな	紙谷 真緒	秋山 直輝		
38	愛媛県	木下 圭悟	前田 佳汰	塩崎 悠花	河村 晶	井上 美咲
39	高知県					
40	福岡県	上田 咲音	小島 夢華	宇野 聡	平松 明奈	大庭 由梨奈
41	佐賀県	今福 咲楽	田中 絆愛	松永 果歩	山崎 聖華	山田 麻矢
42	長崎県	小嶺 彩	一ノ瀬 綾菜	清水 愛琉	山口 悠彩	松尾 風香
43	熊本県	清永 皐樹	田川 あかり	島津 優凜花	小松 良太郎	松岡 可恩
44	大分県	吉田 かりん結愛	薬師寺 真杜	後藤 優奈	吉田 靖仁	西嶋 奏人
45	宮崎県	堀川 和瑚	大峯 果林	岩坪 桃子	飯地 智佳	木場 れん
46	鹿児島県	宮脇 愛	大野 耕太郎	金子 千紗	宮下 葵乙	田中 豪明
47	沖縄県	東江 千晶	名嘉 音波	新垣 一花	石垣 結愛	町田 百優
48	オランダ	榎内 友彩	小松 結奈	清水 朱莉	橋本 菜南	
49	ブラジル	石垣 志織	神戸 風花	橋本 理生	松井 光行	

(注) 氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第47回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査 優秀者数 (編)	応募学校数	応募総数 (編)			
			1年	2年	3年	
北海道	4	8	127	24	64	39
青森県	5	4	98	8	68	22
岩手県	5	5	10	0	9	1
宮城県	5	12	36	0	18	18
秋田県	5	2	14	0	3	11
山形県	0					
福島県	5	10	524	0	350	174
茨城県	5	6	230	94	57	79
栃木県	5	8	94	0	61	33
群馬県	5	3	293	0	154	139
埼玉県	5	9	432	9	71	352
千葉県	5	5	234	162	38	34
東京都	5	11	38	3	30	4
神奈川県	5	11	235	10	18	207
新潟県	0	1	1	0	0	1
富山県	3	3	130	24	105	1
石川県	2	2	2	1	0	1
福井県	5	2	54	0	21	33
山梨県	0					
長野県	3	2	3	0	1	2
岐阜県	5	1	49	0	0	49
静岡県	5	7	28	4	21	3
愛知県	2	5	7	2	3	2
三重県	5	2	376	185	179	12
滋賀県	3	5	248	121	119	8
京都府	4	5	327	63	83	181
大阪府	5	7	535	219	235	80
兵庫県	5	5	157	0	52	105
奈良県	5	3	213	12	60	141
和歌山県	3	8	630	210	320	100
鳥取県	1	1	1	0	0	1
島根県	1	1	1	0	0	1
岡山県	5	10	18	6	4	2
広島県	3	1	41	0	40	1
山口県	3	3	7	0	4	3
徳島県	5	3	6	0	1	5
香川県	3	4	18	13	5	0
愛媛県	5	6	6	0	2	4
高知県	0					
福岡県	5	7	569	1	324	244
佐賀県	5	12	358	0	206	152
長崎県	5	3	38	1	14	23
熊本県	5	8	757	145	372	240
大分県	5	8	15	5	7	3
宮崎県	5	8	308	120	107	81
鹿児島県	5	6	136	74	42	20
沖縄県	5	4	40	29	3	8
オランダ	4	1	24	0	16	8
ブラジル	4	1	14	8	6	0
合計	193	239	7,482	1,553	3,293	2,628

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応募 学校数 (校)	応募 総数 (編)	性別		学年別		
				男	女	1年	2年	3年
				(編)	(編)	(編)	(編)	(編)
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
第38回	平成28年度	314	15,246			4,533	6,110	4,603
第39回	平成29年度	357	16,725			4,735	6,910	5,080
第40回	平成30年度	314	14,151			4,182	5,750	4,219
第41回	令和元年度	290	12,760			3,584	5,554	3,622
第42回	令和2年度	319	9,444			2,263	4,377	2,801
第43回	令和3年度	351	13,025			3,253	5,816	3,777
第44回	令和4年度	404	9,249			2,279	3,902	3,067
第45回	令和5年度	278	8,779			2,125	4,141	2,513
第46回	令和6年度	228	7,516			1,936	3,479	2,100
第47回	令和7年度	239	7,482			1,553	3,293	2,628
合計		20,281	585,592			195,085	215,881	174,231

- (注) ・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・学年未記入者は、第35回101名、第36回93名、第37回6名、第42回3名、第43回179名、
 第44回1名、第46回1名、第47回8名で学年別集計から除いている。

第47回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品7,482編の中から選ばれた最優秀賞1編、優秀賞9編、東京都知事賞1編の表彰式及び最優秀作品の朗読は、令和7年8月1日（金）に東京都千代田区のイイノホールにおいて開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。



作文コンクール受賞者、各賞授与者、
「水の日」応援大使『シャワーズ』による記念撮影

©2025 Pokémon ©1995-2025 Nintendo/Creatures Inc./GAMEFREAK inc.

ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。



国土交通省

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>